目次

凡例 …… 1

1 神代

1-1 天逆鉾・国号の由来 …… 2

1-2 鶺鴒・三貴神の誕生・蛭子 …… 3

1-3 天岩戸・和歌のはじめ・高天原と出雲 …… 4

1-4 伊勢神宮、内宮・外宮のいわれ …… 6

1-5 熊野権現・白山権現 …… 7

1-6 天村雲剣・神在月 …… 8

1-7 芥虫 …… 11

1-8 第六天魔王・神璽の由来 …… 12

2 皇代

2-1 八幡大菩薩（胎中天皇） …… 14

2-2 日本武尊・東征・ミヤズ姫 …… 15

2-3 伊吹大明神・醒ヶ井・千の松原 …… 17

2-4 白鳥伝説 …… 18

2-5 奉斎 …… 19
2-6 三昧耶形 …… 20
2-7 道行法師 …… 20
3 教理編（『熱田宮秘釈見聞』）
3-1 迦毘羅衛国・八葉蓮華 …… 22
3-2 村雲剣の来歴（底本、内容を欠く） …… 24
3-3 神宮寺・蓬莱嶋 …… 24
3-4 『梵網経』・日破宮・如是御前 …… 25
3-5 白鳥塚の９つの穴 …… 26
3-6 神宝 …… 28
3-7 本地仏 …… 28
3-8 熱田宮の門 …… 29
3-9 深秘 …… 29
『熱田宮秘釈見聞』の深秘。 …… 30

バタフライ・エフェクト〜〈中世日本紀〉私鈔〜
バタフライ・エフェクト …… 31
熱田神話研究所 …… 32
『熱田の深秘』の内容・荒筋 …… 35
神代 …… 37
皇代 …… 39
教理編 …… 41
『熱田の深秘』の〈構造〉
伊勢からの需要 …… 44
つけたり …… 46
伏線 …… 47
複層性 …… 49
複層性2 …… 50
教理編、成立の背景 ……

『熱田の深秘』の成立過程

神代……52
熱田宮の縁起へ……54
漢文化……55
成立時期……58
それから……59
参考文献（さんこうぶんけん）……72
図書案内（としょあんない）……73
あとがき……74
索引（さくいん）……75

凡例

一般に中世に流布したとされる『熱田の深秘』の現代語訳です。現在は、前半の「神道由來事（假題）」と、後半の「あつたのしむひ」に2分割されることが多いですが、今回は、「神道由來事（假題）」に対応する「神代」と、「あつたのしむひ」の前半部分「皇代」、『熱田宮秘釈見聞』として知られる「教理編」の大きく3分割にして、内容ごとに小見出しを私に立てています。

底本は『神道大系　中世神道物語』の「神道由來事（假題）」「あつたのしむひ」。『神祇官』『別傳』は、伊藤正義「続・熱田の深秘」から『熱田宮秘釈見聞』は『真福寺善本叢刊』の翻刻から参照しました。

底本の、おもむきをいかすように、参照したテキストと異なる用字を、あえて私に附した場合があります。脚註に異同や、意味のとりにくい語彙の解説を極力つけ、巻末に用語解説と索引をつけました。

1 神代

1-1 天逆鉾・国号の由来

それ我が朝というのは、天神7代・地神5代の神の代であります。はじめ3代は、親も子もなく、1人づつ、おあらわれになりました。3代の（後の）時から、嫁ぎを、おはじめになりました。

7代の神をば、伊弉諾尊を男として、伊弉冊尊を女といいました。この2人の神のおっしゃったのは「そもそも、これより下に国がないことはない」と、天逆鉾を指しおろして、お探りになると、鉾のしずくが葦の葉の上にとどまって、砂がさだまって巌となったので、これが国のはじめになりました。そのことによって我が朝をば葦原国と名付けました。

「国はできた。名前を、どういったらよいか？」と、お誓いになりました。その国の中のあたりに、大日如来が智拳印を、むすびになって座っておられました。これを、ご覧になって「そうであるなら、この国は三身相応の国である。末代、仏法成就の地である。めでたい国であるので、どうしても仏法を広めよ

我が朝：日本のことを中国（当時は震旦(しんたん)と呼んでいた)やインド(天竺(てんじく))、韓国と区別していう言い方。
天神7代・地神5代：まあ神様の数え方というか認識。
嫁ぎ：男女がペアになって、子供を産むという、やり方。4代目からだよね。
伊弉諾尊・伊弉冊尊：用字は『神祇官』による。
天逆鉾：そういう名前の呪具(じゅぐ)。
葦：植物の名前。
砂：すな。
巌：大きな石

大日如来：仏教（とくに密教）の最高の仏。
智拳印：金剛界・大日如来の手のカタチ（印相）。
三身：仏様の現れ方の3つのタイプ。法・報・応の3つ。
仏法成就：底本「けつほう」に作る。『神祇官』より改める。

う」とおっしゃって、大日のお座りになった国なので大日本国と名付けました。

1-2 鶺鴒・三貴神の誕生・蛭子

そもそも熊野権現と天照大神と、白山権現と、恵比須と、出雲大社は父・子でいらっしゃいます。その理由は、天神7代、伊弉諾・伊弉冊の2柱の尊が日本国をお作りになって、お治めになり「国があっても人がいない。一切衆生なくては適さない」として「我々が、夫婦ということをはじめて、産んで広げていこう」と、セキレイ(鶺鴒)が尾を動かすのを見て、美殿の交合をはじめ、女・男ということをなさって、まず4人の子供をお産みになりました。

1は天照大神、アマテル尊。2は月読尊、丹生大明神であります。3は蛭子の王子、縮糸根尊、胡御前がこれです。

(4は素盞烏尊、出雲大社がこれです)こりように4人の子供を、お産みになって、その後、一切衆生をお産みになりました。

また、国はあっても山がないとして、山野をお産みになりました。そうであるので、伊弉諾・伊弉冊は一切衆生の父・母であります。山野にも父・母ということがあります。

熊野権現:『別傳』この前段に(鹿嶋大明神は武甕槌神(たけみかづちのかみ)といいます。同じく香取明神をば経津命(ふつぬしのみこと)といいます。ならびに)

天照大神:現代では「アマテラスオオミカミ」が一般的だが、当時は「てんしょうだいじん」という呼び方も通用。

恵比須:『神祇官』は「夷」に作る。七福神をイメージして用字。

父・子:『別傳』神璽にヲヤコ也

一切衆生:生きとし生けるもの。

夫婦:「めおと」も漢字を当てると夫婦なので、女男(め・おとこ)に夫婦を宛てる。

セキレイ:鳥の名前。

美殿の交合:夫婦になって子供を産むことの古語・雅語。

女・男ということ:「め・おとこ」ということ」か?

子供:底本「わうし」

丹生大明神:『別傳』三輪大明神に作る。丹生大明神が適当か?

『別傳』三輪大明神のまま進行。

縮糸根・胡:『別傳』より借りる。

4は素盞烏尊……『神祇官』より補う。

このように、それからも、（子供を）もうけお広げになりました。これをば天照大神に、お譲りになりました。山野は三輪明神に、お譲りになりました。

蛭子は骨もなく、片端でいらっしゃったので、舟に、お入れになって海に、お放ちになりました。その時、龍王が、これを見て、おそれおおくも伊弉諾・伊弉冊の御子であるとして守護なさいました。御子がおっしゃるには「さて海を譲ってもらえることになった、釣りをして漁師を、ちょっと育ててみよう」といったので、御子を夷（三郎）とお名付けになりました。

1-3 天岩戸・和歌のはじめ・高天原と出雲

素盞烏尊は、譲られる（領地）もなくて、悪事を好んで「そもそも天照大神は女子である、丹生大明神も女子である。蛭子は片端である。私は末の子であるが、男の子である。私こそ、子供の神と思われるべきはずなのに、譲られる（モノ）もなく、過ごしてしまうのは、満足できない。そういうことなので、天照大神と夫婦になって子孫を増やしていこう」とおっしゃって。

その時、天照大神は、そんな気持ちはありませんでした。「私の姿を見なさい」といって、たちまちに大蛇になってしまわ

片端：不完全な様子。差別語。

夷三郎：『別傳』より三郎を補う。西宮神社（夷社）の祭神。この部分『神祇官』は本文を欠く。

素盞烏：『神祇官』では「ソサノウ」。『別傳』より用字。

れました。「私は（女性としての）美しい姿を、このように変えましたが、それでもよいなら、いらっしゃい。さしさわりはない、ともにいましょう」とせまった時に、素盞烏尊からお隠れになろうと、天岩戸を、おし開きになり、その中に閉じこもりになりました。

その時、素盞烏尊は腹を立て、大和国宇陀郡に城郭をかまえ、大地には千の剣を立てて、大空には鉄の網をはり、謀叛を、おこしてしまわれました。

その時、丹生大明神を大将軍として、9万8千の戦神を、そろえて宇陀郡で素盞烏尊と天照大神が、お戦いになった。

（素盞烏）尊の無礼からはじまったことなので、戦に、うち負けて、鉄の網は、うち破られて、千の剣は、け散らしられてしまいました。その時、四方の神たちは勢いづいて「ちわ(千刃)やぶる」とさえ歌いになられました。そうなので神楽の奉納などするときは、神（様）を勢いづけてさしあげることなので、大和言葉に、やわらげて「ちはやふる」として歌うのです。

素盞烏尊は戦に、うち負けて出雲国に行かれることになりました。天照大神が、おっしゃるには「私と仲違いをして、

天岩戸：そういう名前の岩穴。

大和国：現在の奈良県。

宇陀郡：『神祇官』は「宇多」に作る。現行の用字に、そろえる。

城郭：底本「しやくくわく(ママ)」。『神祇官』より宛てる。

無礼：底本「ふれひ」。『神祇官』は「無勢」に作る。

神楽の奉納：底本「かくらまいらせ」

出雲国：島根県東部。

日本国内で迹を垂れる理由はない」とおっしゃったので「さらばである」と、虚空を目指していらっしゃいます。

ある時、大きな島が流れてくるのを（素盞烏尊が）ご覧になって「うれしいことだ。これが私の屋敷になる。私の父母が、あたえてくださったからこそ」と、引きぬいて使って、なで留めて、お社を、お立てになりました。和歌の関とはこれであります。

1-4 伊勢神宮、内宮・外宮のいわれ

そもそも天照大神が我が朝の主として高天原に迹を垂れて、南閻浮提の衆生をかえりみて、この国を、お治めになって日本でお奉りされることは、人皇11代の帝・垂仁天皇の、御時、伊勢国・二見浦へ天から、お降りになりましたのを、度会郡・五十鈴川の水上に、お奉りさしあげてからずっと、60あまりの州の大神に、優れておなりになりました。内宮がこれであります。

皇太神というのは、外宮で伊勢国にあり、天照大神に先んじて、親方として、いらっしゃいます。由来は、天照大神が

迹：『神祇官』は跡に作る。本地垂迹の迹を用いる。
虚空：大空。
（素盞烏尊が）：文意より補う。
引きぬいて使って：底本「こくつかう(ママ)」。『神祇官』「御手ヲ以テ」。訳については少し考える必要が。
和歌の関：『神祇官』は若關に作る。スサノヲは和歌の始まりとされるので、その名所(などころ)があったのか？
南閻浮提：南贍部洲(なんせんぶしゅう)。インド・中国・日本が立地していると考えられている場所。
衆生：人々。
帝：『神祇官』は御門に作る。一般の用例に従う。
五十鈴川：『別傳』は御裳濯川(みもすそがわ)に作る。
皇太神：『神祇官』廣大明神宮『別傳』王大臣宮に作る。私に用字する。
先んじて：底本「せん事は」。『別傳』は「宣旨ヲバ先外宮へ申せ」に作る。底本に脱あるか？
由来は：『神祇官』『別傳』ともに内容を欠く。度会神道系の言説にとまどいがあったのでは？

日本国に天から、お降りになるといってご覧になっていると、（外宮は）出雲国の田中明神と呼ばれるようになった後に、高天原に迹を垂れになって、皇太神として、おあらわれになりました。内宮へ詣る人は、まず、外宮を参宮して、（外宮に参拝した）そのことを（内宮に）申しあげれば、内宮は、お喜びになります。そうであるので、内宮・外宮は両界の心持ちであります。本当の気持ちより訪れれば、両界の場所であります。おそれおおくも、天照大神の由来、大梵天王の由来であります。

1-5 熊野権現・白山権現

熊野権現というのは、伊弉諾でいらっしゃいます。白山権現というのは、伊弉冊でいらっしゃいます。そうであることによって、日本国を、お作りになって、天照大神に、お譲りになりになって、（伊弉諾が）摩訶陀国で大王に、おなりになったのが、王家が滅んだので我が国で（迹を垂れたの）です。その理由は、末代 仏法 成就の地であるべきとして、また日本国へ、飛んでお帰りになられて、紀伊国の音無川のそばに

両界：金剛界(こんごうかい)と胎蔵界(たいぞうかい)。密教(みっきょう)の考え方で2つの世界でワンセットを意味する。
心持ち：底本「心ち」『神祇官』「心地」につくる。「ここち」の意か？
由来：底本「御こと」

摩訶陀国：インドの釈迦がいた国。
王家が滅んだので：底本「御よつきしかば」

熊野権現として、おあらわれになって、擁護、塵に交りて、衆生を済度なさります。

（伊弉冊は山野を三輪明神に、おゆずりになって）百済国の大王として、おあらわれになったのが、王家が滅んだので、日本国に飛んでお帰りになって、北陸道の中の白山権現としてあらわれ、衆生を済度なさります。

1-6 天村雲剣・神在月

そもそも素盞烏尊は天照大神と仲が、お悪かったのが、仲をお直しになる由来は、出雲国の山というところに、常に光るモノが集まって山を鳴らしていました。（素盞烏）尊がおっしゃるには「私が、このようでありながら、どのようなモノであれば変身できるのだ」と、ご覧になっていると、宵の頃におよんで人のいる家がありました。立ちよって、おっしゃるには「人の家はあっても、主がある家はまれである」また、ある家で子供が泣いて悲しむことが、はなはだしく。尊は、ご覧になって「あなたは、なにを嘆いているのですか？」というと、子供が答えて申すには、「この水上に1つのヘビがいます。いつも里に来ては、人を捕まえて飲み込んでしまうことが、何度も

擁護：神仏のみまもり。底本「とうこ」『神祇官』より宛てる。同居（どうご）神仏と人々が一緒に住むことの方が適切とも。

塵に交り：神仏は高貴（光）で人々は欲深い（塵）、神仏が人々の中に入り込む、たとえ。和光同塵。

済度：神仏による救済と悟りへの道をひらくこと。

（伊弉冊は……『神祇官』より補う。『別傳』「伊弉諾」に作る。

三輪明神：『神祇官』「入羽（ニウ）ノ明神」に作る。『別傳』「三輪明神」に作る。

百済国：『神祇官』「白濟國」に作る。私に改める。

北陸道：底本「ほくろくたう」陸は6の異体字として使う。

出雲国の山：『神祇官』「出雲国山田」に作る。

子供：底本「おうち」。『神祇官』「祖」『別傳』「翁」に作る。文意的に後者の方が適当。

水上：『神祇官』「南ニ山」に作る。それ以外に異同がある。記紀神話的には水上（川上）の方が適当。ヘビ・山田という連想から山のイメージができたのでは？

ありました。親が飲まれる時は子供が悲しみ、子供が飲まれる時は親が悲しむ。村南・村北に泣く声が絶えない。そうであるから、私自身も1人の姫を持っています。今日・明日という時間で飲まれてしまいます。そのことを嘆いています」と申しました。「あなたの名前はなんといいますか？」とおっしゃいますと、男は手名槌、女を脚名槌といいました。夫の命の長さは8千9百歳でありました。「天照大神のために老いてしまいました」と申しました。尊は、おあわれみになって「そうなら、あなたは私とは他人ではない。そうであれば、その姫を私にください。丘ツチ(大蛇)を退治しよう」とおっしゃられたので喜んで、名前を稲田姫と申すのです。

尊の、ご計画では「大蛇は必ず酒を飲むものだ」といって大きな容器(舟)に酒を満たして、稲田姫を美しく装わして、岸にお置きになった時、あの大蛇が来て見ると、岸にいる姫が酒舟に写るのを姫（の本体だ）と思って、十分に（酒を）飲んで酔っぱらってひれ伏したのを、尊は、お持ちになってる十束剣で大蛇を、ずたずたにお切りになったので、（大蛇は）死んでしまいました。そうしているうちに、尾の方が切れないで

村南・村北：『別傳』「東西南北」

手名槌脚名槌：『別傳』より用字。8千9百歳：『神祇官』（八）千九百才、『別傳』八百才に作る。「天照大神のために…：「ため」の意味が不明確。天照大神に仕えたのか、天照大神に老けさせられたのか？『別傳』内容欠く。他人ではない：底本「よそならす」

丘ツチ(大蛇)：丘のように大きな大蛇。おろち。蛇は蛇の異体字。稲田姫：文脈がおかしいか？舟：『神祇官』『別傳』船に作る。一般には槽(ふね)の字をあてるよう。私に用字する。

岸にいる姫：底本「きしな〔た〕ひめ」『神祇官』「峯なる姫」。ここだけクシナダヒメは不自然。「岸なる姫」が適当か？文意は同じだが表現に異同がある。

十束剣：『別傳』「十握剣」に作る。さすがに現代で握(つか)とは読めない。

ずたずた：底本「すんずん(寸々)」。死んでしまいました：底本「むなしくなりぬ」『神祇官』「滅玉フ」に作る。

あったのを、割って、ごらんになると、1つの剣がありました。尊が、お取りになって、長い間、持っておいでになられました。大蛇の尾の中にあった時は、いつも紫雲が、たなびいていたことによって、天村雲剣と、いうのです。

そののちに、尊は稲田姫と結婚なさって、一緒に、お出かけになる時に、父・母が、なごりを、おしんで「私を、こいしく思う時は、これを、ご覧になってください」と、黄楊の櫛を額に3度あてて、うしろざまに、お投げになられました。そのような理由で、櫛を投げることは、親を（死者として）送ることで不吉として避けるのです。

「婿をもらったら、必ず引出物を、するものです。何を、さし上げましょうか？」といって、鏡を1面、さし上げました。

その時、素盞烏尊の、おっしゃるには「私は天照大神と仲が悪いままでは、やくにたたないことだ。そういうことなので、この剣と鏡を、さし上げて仲が直るようにしよう」と（天照大神に）さし上げになられました。天照大神がおっしゃるには「この剣は、昔、私が高天原にいた時に持っていた剣です。また、鏡は私の中台です。うれしいものをもらったものです。

紫雲：紫(むらさき)色の雲。ありがたいとされる。

天村雲剣：『別傳』は天村雲剣の異称として「八雲剣」という言葉があるとする。

結婚なさって：底本「ちきりをむすひたまひて」

一緒に、お出かけ：底本「おなしく みゆき」

黄楊：木の種類。

中台：本尊。『神祇官』身躰に作る。

このような気配りの深い人と仲が悪いのは間違いです。仲直りをしましょう」として、1年を360日に、お決めになりました。四方の神たちが出雲国へお行きになるとして、10月には出雲国に皆々、末社の神まで、お出かけになられます。このような由来があるので、出雲国では神在月といって、ほかの国では神無月というのです。このような理由で鏡宮として、海辺にお奉りされているのは、今（の話）の素盞烏尊の鏡です。

1-7 芥虫

また櫻宮というのは、用明天皇の、御時に、帝の宣旨があったのは、「あれまあ、これから空に、芥虫といって、鉄を喰うものがあらわれる。（身は、うつくしい色をしている）見てみたい」と宣旨があった時に、程なくして、天より虫が1匹、おりてきて、帝が、これを、ご覧になって「私が願っていたところの虫である」として、お飼わせになりますと、はじめは鉄を喰らい、あとには山のように（大きく）なって、鉄のない時には人を喰う（ように）なりました。あげくのはてには、勅 諚 にも従わず、すでに敵となってしまったので、この（虫）を滅ぼそうと、お思いになっても、鉄をまるめた（ような）

360日：『別傳』三百六十余ヶ日に作る。太陽暦に近い日数。
末社：中心ではない神、枝宮。
このような：『別傳』「四方神々前ニハ、彼尊責落給、今十月待（マヽ）給トテ、鹿嶋明神、尊中能坐故、鹿嶋 神集メ、一夜杭幷鹿嶋 子シ給、十月一日ニ鹿嶋立〆、出雲集、三十日住給故ニ」を挿入。
海辺：底本「かいへん」字義未詳。『神祇官』海内に作る。この鏡宮は伊勢の朝熊神社の異称か？
鏡：底本「かみ」に作る。『神祇官』より改める。『別傳』この後に（剱巻として、別の多巻・口傳があります）
櫻宮は個人的には読み聞かせに注意が必要。『別傳』櫻宮の内容を欠く。
櫻宮：底本「さくゝ（ママ）のみや」に作る。『神祇官』「サクラ」に作る。かりそめに用字する。〈参考〉宇爾櫻神社（うにさくらじんじゃ）
芥虫：ゴキブリの古称。
身は：『神祇官』より補う。
あげくのはてには：底本「けつく（結句）。
勅諚：朝廷（ちょうてい）の決まり。

体なので、大刀・刀も（刃が）たちませんでした。方法がみつからなくて、天照大神に申しあげになられました。芥虫は朝敵になりました。天照大神には「百王でさえも滅ぼしてしまおう」という誓いがありました。（「この虫を、おなくしになってくださるのなら、ツキメ・カシキメの2人を（天照大神の）宮へ参内させましょう」と、（帝が）お誓いを、お立てになると）この虫を大川に、お入れになると、山のように見えていたのが、とうとう、滅んでなくなってしまいました。海の磁石という石は、この虫の舎利(骨)の岩です。骨までも鉄（を喰うの）であります。帝は、お喜びになって、姫君を（天照大神に）仕えて、かしづかせて2人を宮に参内させられました。

1-8 第六天魔王・神璽の由来

ここで第六天魔王という悪魔、日本国に目をつけて「あやうく日本国は大日如来がお座りになった国であり、末の世に釈迦仏という仏がおあらわれになって、仏法を広める時は、興ざめなので聞きたくもないことがある」として、日本国を知行していました。その時は、南閻浮提は大紅蓮でありました。

百王でさえ…：底本「百わうをたにも ほろほさん」『神祇官』「百王ヲ守ン」。底本は「最低でも百代はつづけて、それで滅ぼしてしまおう」という寓意か？百王：天皇の治政が百代つづくこと。

この虫を：『神祇官』より補う。ツキメ・カシキメ：『神祇官』ツキメ・カシキノに作る。後に「ツキメ・カシキメ」とあるので改める。斎女・賢女の意味か？　斎王と女官の寓意。

大川：底本「大かは(いノ誤カ」とある。『神祇官』「大海」。

磁石：底本「きしやく」『神祇官』「茲石」。『神祇官』に寄せての用字。

を喰う：『神祇官』より補う。

仕えて、かしづかせて：底本「いつき かしつき」

参内：底本「まいらせ」

第六天魔王：欲界(よくかい)の第六天（他化自在天）の魔王。底本「大六てんのまわう」

あやうく：底本「あはや」

知行：国を治めること。

大紅蓮：紅蓮地獄か？　ものすごく寒い地獄。色のイメージから炎の形容にも使う。

6万5千年の後に、天照大神「本当は、日本国は私の父・母、伊弉諾・伊弉冊の尊が、中台であって、私に、お譲りになって、年が長く経っている。理由もなく魔王に（日本国を）打ち落とされてしまうのは、満足できない」と、お思いになっているところに、須弥山の頂に、第六天魔王が立って、南閻浮提を見わたして、怒りをなされているところに、天照大神が座って、おいきになる時、魔王は、これを見て、「お前は、どういう人だ。どこの人であるのか？」と尋ねられました。「日本国は（私の父母が）開発の国である。このような小国に目をつけておられることは無益です、もとの通り私に、おあずけください」とありましたら、「国が欲しいのではない。ゆくゆくは仏法成就の土地になってしまう。心外なことであるのだ。つまるところ、お前が「仏法の名前も聞かない、見ない」と約束できるのなら、（日本国を）あづけてさしあげましょう」と問答になりました。その時、天照大神は、だましてしまおう、と、お思いになって「おっしゃったこと（の通り）私は魔王の代官として、国の主として仏法を広めない」とおっしゃったので、魔王が申すには「つまるところ、仏法の名字を見ない聞かない

中台：底本「ほつちうたい」字義未詳。『神祇官』「開發」、『別傳』「開始」に作る。後考を待つ。開発重代の脱とも『神祇官』によりすぎの気も？

南閻浮提：底本「なんゑんのたひ」に作る。平易に改める。

欲しいのでは：底本「おしさ」『別傳』このセンテンスの後に、別紙1巻と口伝があるとする。

成就：底本「しゆしゆ(ママ)

名字：一般に姓を示すが、「仏法の「ぶ」」の「ぶ」の意味か？

と、ご誓文を示してほしい」とあった時、「そうとあれば誓文をしましょう」として「かえって、聞きもとめないと、取りも返さないし、（とりきめた）証拠が、とだえてしまう」とおっしゃったので、魔王の方からは日本国の指図、判形までして、さしあげになった。そのようでこそ、神の押手(璽)と書いて神璽と読むのです。この誓文を、おそれて、経論・写経を好き勝手にあつかう。そうだからこそ、法師は神明(天照大神)の、御前には参拝しないのです。そうして日本国を譲られて、得ることにおなりになって、天岩戸を、おし開きに、おなりになって。6万5千年の間、暗闇になっていたのに、日光・月光が輝いて、「あら、おもしろ(面白)」と声をあわせて喜びました。そうなので、大和言葉に、やわらげて「あらおもしろ」と申すのです。

誓文：誓いの契約書(けいやくしょ)。

証拠：底本「しるし」。ここ意味が不明瞭。天照大神が魔王との交渉が途絶えるのを恐れて「逆に、聞きいれないと取り返しがつかない、交渉が途絶えてしまう」と言ったのか？

指図：絵図面。

判形・押手・璽：ハンコを押した印面の跡。格調を高めるために言いかえている。

好き勝手にあつかう：底本「もてあそぶ」『神祇官』「翫(もてあそ)バズ」

大和言葉：底本「やまと〔こと〕は」

2 皇代

2-1 八幡大菩薩（胎中天皇）

神武天皇は、はじめての帝でございます。熱田明神とは景行天皇の第2の王子、日本武尊のことであります。八幡大菩薩は、

実は仲哀天皇が日本武尊の息子（ネタバレか？）なんだよね。神功皇后=応神天皇を先に書くのは、なんか理由があるのか？

第2：底本「たひこ」に作る。『神祇官』『別傳』第二。これに従い改める。

仲哀天皇の王子、神功皇后の第4の王子であります。仲哀天皇は新羅を、お攻めになるとして、異国のために討たれられになりました。そのために、神功皇后は仲哀*天皇の、かたきを、お打ちになるとして、新羅を、お攻めになるのに、八幡大菩薩は神功皇后の、お腹（の中）に、おやどりになっている時、（仲哀）天皇の敵を討とうとして、新羅に、お発ちになりました。お腹の中にいらっしゃるといっても、「男子で、いらっしゃるのなら、願わくば、攻めおとしてしまう間は、お生まれになさるな」と、おっしゃりになったので、お腹の中に3年、待っていらっしゃいました。

伊勢大神宮に、このことを、ご報告になられました。「これを力（頼み）と、お思いになりなさい」として、魂・魄という2人の荒御前をおつけになりました。魂は諏訪大明神、魄は住吉大明神であって、神功皇后は新羅を、攻めおとしになられて、我が朝にもどり、宇佐宮で八幡大菩薩を、お生みになりました。応神天皇が、この（方で）あります。

2-2 日本武尊・東征・ミヤズ姫

熱田大明神というのは、景行天皇の40年に、東国の夷が、

仲哀*天皇：底本「ひら(ママ)あいてんわう」。『神祇官』より改める。

魂・魄：『神祇官』『別傳』より用字する。魂魄(こんぱく)だと魄は半濁音だが、辞書的には「はく」が正しい。

荒御前：『神祇官』『別傳』より用字する。神功皇后の三韓征伐にあらわれる荒魂(あらみたま)の称え。荒魂は武徳を持つとされる神様のジェンダー(区分)。

熱田大明神というのは：底本、前のセンテンスにつける。私に改める。

夷：『神祇官』『別傳』から用字。蝦夷(えみし・えぞ)のこと。

我が朝家に背いて、関より東が静かではありませんでした。帝のおとどは、2の王子、日本武尊が、お力も強く、心も剛（の者）でいらっしゃったので、「東を、お攻めになってください」と宣旨がありました。天皇の、お恵み（命令）にしたがって、都を出発して東国に、お向かいになると、まず、伊勢大神宮に、お行きになって、このいきさつを、お申しになられました。「昔、内裏から納められた剣*、これを腰につけていきなさい。用心して、なまけることのないように」と、剣を、いただきになりました。もらって喜んで尾張国・松后嶋の源大夫師介のところへ落ちつきになられて、この源大夫の姫宮に、心を、おうつしになって、3年ございました。その年に、東国へお向かいになって、攻めて（夷を）したがわせて、また、尾張国、源大夫師介のところに到着になって、姫を妻にして、かさねて、また、3年、ございましたが、「身分の低い女に心をうつして、年月を、おくってしまうのは勅命に違反しているのに似ている」として、この嶋を、お出になって、都へ、おのぼりになりましたが、ミヤズ姫に名残をおしみになって、「私を、こいしいと思いになったら、この剣を枕にたてて見なさ

我が朝家：天皇家。
関：関所。東国との関所は鈴鹿（すずかの）関か不破（ふわの）関あたり。その後、箱根（はこねの）関に移っていく。
静かではなかった：いざこざが、あとを絶たなかった。
帝のおとど：帝様のような用法。日本武尊：『別傳』大和武尊に作る。
宣旨：天皇からの命令。
剣*：『別傳』「十握剣」に作る。一般には天叢雲剣。
松后嶋：『別傳』「松尾嶋」に作る。『平家物語』では「松子の島」と書いていたよう。覚一本系（岩波文庫　四・218頁）にも類似する内容（松子の島の内容はない）があるんだけど、屋代本の剣巻が詳しいらしい。宮簀媛（后）の待つ嶋の意味か？
源大夫：『神祇官』『別傳』より用字。
師介：『神祇官』より用字。『別傳』「諸助」に作る。
姫宮：『神祇官』「ミヤス姫」『別傳』「官安姫」に作る。
身分の低い女に心をうつして：『別傳』内容を欠く。

い」と、おはからいになられました。

2-3 伊吹大明神・醒ヶ井・千の松原

そもそも、この剣というのは、出雲国の大蛇が持っていた剣でありました。この剣は美濃国の伊吹大明神の剣であります。日本武尊は伊吹山の、すそのを、お通りになられる時、尊を殺してしまって剣を、奪いとろうとするために、伊吹明神は身の丈、5丈くらいの大蛇になって、不破関に、お伏せになられました。尊は、これを、ご覧になって、「あなたほどの者が、私を捕まえようとしているのですか？」と、飛び越えになられました。お足を大蛇の爪に、お当てになったので、毒蛇であって、痛みが身を分ける（ように）かけのぼって、その身が熱くて耐えがたいのは、いいようがない（ほどでした）。

近江国をお越えになって、弓の弭で盤石をつき割り、水をだして、御身をお冷やしになりました。「今、冷めたり」と、おっしゃつさたので、それより醒ヶ井の水というのです。

（体が）冷めた効果もありませんでした。近江国・千の松原と

そもそも：『神祇官』脱あるか。

美濃国：『別傳』「江劦」（近江国）に作る。まあ、国境なので。

伊吹：『神祇官』「伊冨貴」、『別傳』「井吹」に作る。一般の用字に改める。

爪：『神祇官』『別傳』角につくる。ヘビの、とがった部分。牙（きば）か角（つの）。

痛みが身を分ける（ように）かけのぼって：底本「つうしんをわけてはれのほり」「痛、身を分けて、はれ（かけカ）のぼり」か？

弓の弭：弓の先端。

盤石：大きな岩。

醒ヶ井：滋賀県の地名。地名の縁起説話。

いうところで、御枕を西になさって、伏してしまわれました。

尊が、お思いになるのは、「こうなると思っていたら、どうしてもミヤズ姫を、ここまで具足したものを、今（もう）1度、見たいな」と、恋しくお思いになられました。また、ミヤズ姫も、尊を恋しくお思いになって、千の松原で寝込んでおいでなにるようすを、お聞きになって、お駆けつけになられました。尊は、お喜びになって「あづま(吾妻)より」とおっしゃったので、東のことを「あづま」というのです。それを最期の、お言葉として尊は、おなくなりになってしまわれました。

2-4 白鳥伝説

またたく間に、お命がなくなっているのに白鳥になって西を目指して、お飛びになられました。熊野の岩田川というところへ、飛んで、おつきになりました。熊野権現が、ご覧になって「この場所は、私が迹を垂れるいるのです。お前は、中国を化度なさいなさい」と、あったので、また、尾張国へ飛んで、おかえりになられて、ミヤズ姫の屋敷であるからとして、松后

ミヤズ姫：『神祇官』身安姫に作る。

具足：(女性などを) いっしょに連れてくる。

寝込んで：底本「ふさせ」少し恣意的な訳。

駆けつけ：底本「まいり」少し恣意的な訳。

あづまより：『神祇官』『別傳』「アヽツマヨ」に作る。方位の縁起説話として比較の意味と誤解されそうな「より」を避けたのか？

またたく間に：死んでしまったのに一瞬で（生きた）白鳥となったの意味。『神祇官』ニュアンスを変える。『別傳』は省略がある。

中国：熊野と東国の間の土地。

岩田川：『別傳』より用字。

化度：教化済度(きょうけさいど)の略。人々を仏法に向かわせて救うこと。

嶋に飛んで、おつきになられたので、東国を、攻めた時に、お挿しになっていた、戦の旗の先に立って、落ちつきになったところを旗屋と名付けられました。大明神が白鳥になって、飛んで、おつきになったところを白鳥という塚にしました。

2-5 奉斎

これは5月のことだったので、田をかいて、苗を散らして、植えようとしていると、聖が1人いました。「あなたは、どういう者なのですか？」と、おっしゃられると「紀大夫といって、この場所の主です」と申され、「私に、この田をください」と、お求めになられて、一夜のうちに千本の林に、なさいになりました。この場所に剣明神として、お奉られになっています。

さて、ミヤズ姫は、尊の、御形見の剣を枕に立てて、お置きになったので（この剣が光を放って、何もしないのに燃えたので）すなわち、田の中に杉の木があったのに、よせかけて置いたので、たちまちに、この剣が、火になって、杉の木が焼けて折れてしまいました。はじめは「焼け田」と名付けました。焼けた時に、どれくらい熱かったのでしょう？　それから

攻めた：底本「せ〔め〕し」。

旗屋：『別傳』幡屋に作る。地名に改める。

かいて：たがやして。

聖：底本「せう」。『神祇官』「祖」、『別傳』「翁」につくる。尉(じょう)とも。

＊剣明神に奉られるのが聖で、紀大夫は田んぼを耕していた人。

この剣が：『神祇官』より補う。

焼け田：『別傳』「失田」に作る。地名・矢田(やだ)と関連か？

「熱田」と呼ぶのです。ミヤズ姫というのは氷上宮、これである。紀大夫殿もいらっしゃいます。源大夫師介も、後を、お継ぎになって、大明神の、ご後見でいらっしゃいます。

2-6 三昧耶形

そもそも熱田大明神の、お持ちになっている剣は、愛染明王の三昧耶形で、仏、在世（の時）より、人皇に、お伝えになられています。そうなので、この剣の光は、それは日々蒼天、下は奈落の底、東西南北まで、いきわたります。この剣の光にあたる者は、必ず成仏・得道の縁になるのです。そうであるので、熱田大明神に1度、お参り（する）者は、三悪道の苦しみから逃れ（られる）と見通せます。この剣の光は、知者には、ご覧になることができます。まよいの（ある）人は見ることが難しい。

2-7 道行法師

新羅の帝の僧に道行法師が、これを見て「日本国の尾張国・熱田大明神の、お持ちになっている剣は、本当に見事な剣で

熱田：名古屋甚句の中で西行が「涼しいのに熱田とは、これいかに？」という文句が。
氷上宮：底本「ひるのみや」。『持』により改める。
ご後見：底本「御うしろみ」『別傳』異にする内容を含む。
愛染明王：仏(ほとけ)の名前。
三昧耶形：仏の心持ちを持ち物や手のカタチで表現したモノ。
仏、在世…：底本「ふつさいしょなり」に作る。『神祇官』『別傳』より改める。
人皇：『神祇官』『別傳』「仁王」
光は：『別傳』この手前に（この剣は衆生の本有(ほんぬ)で無始無終です。元来は天地陰陽、法界円融のするどい剣です。丸（ア）字が不生の剣です）
それは：底本「それ(うへカ)は」。『神祇官』「空ラハ」に作る。
日々蒼天：底本「ひゝさうてん」。『神祇官』悲想天、『別傳』非相天に作る。非想非非想天（有頂天の異名）とも。
成仏・得道：さとりを開くこと。
縁：原因(げんいん)。
三悪道：地獄・餓鬼・畜生の道
知者：道理をわきまえた人。
見事な：底本「めでたき」

ある。」と、申したので、新羅の帝は、このことを、お聞きになられて「あら、欲しいものだ。どのようにして盗るべきか？」と詮議があったのを、道行法師は「盗ってまいりましょう」といって、不沈の船を、こしらえて乗って、日本国へ渡って、熱田へやってきて、1七日、籠もり、この剣を引き入れて、五条の袈裟に包んで、伊勢国・日永というところに到着しました。剣は、袈裟を破って、またもとの宮へ、お飛びになられました。道行法師は、またやってきて、2七日をおこなって、この剣を引き入れて、七条の袈裟に包んで、播磨の明石というところまで、お逃げになりました。また、袈裟を破って、もとの宮にお入りになった。道行法師は、帰ってやってきて、3七日をおこなって、また、この剣を九条の袈裟に包んで、また、この剣に申されるには「仏でいらっしゃるのに、どうして袈裟を、お破りになるのです」と申されると、そういうことである。異国の宝となってしまいそうなのを、熱田大明神は住吉（大明神）に、このことを、おっしゃりになったので、

詮議：底本「せんき」『神祇官』「宣旨」に作る。
不沈の：底本「ふちの」『神祇官』「トウノユイ」『別傳』「十捜」
1七日：7日を1単位にした祈りの儀式。
五条の袈裟：そういうタイプの僧衣(そうい)。
日永：『神祇官』『別傳』「日長」に作る。四日市の日永に改める。
2七日：7日2単位（14 日間）の祈りの儀式。以下同じ。
七条の袈裟：僧衣・袈裟の種類。五條の袈裟より上等。

また、この剣に：その前に『神祇官』『別傳』「筑紫の博多まで下って」を挿入する。
そういうことである：仏の化身(けしん)である剣が袈裟を破るのは、おかしいと説得されて納得してしまった。
住吉（大明神：『神祇官』『別傳』より大明神を補う。荒御前としての住吉を受けているのか。

住吉は筑紫の博多へ、お行きになって、道行法師を、殺しになって、この剣をとり（かえし）て、内裏に、ご献上になりました。内裏に2年、お留まりになりました。朱鳥元年3月18日に、熱田宮に、お入りになられました。

新羅の帝は剣を盗ることもできないで、道行は殺されてしまいました。腹を、お立たせになって、天竺から生身の7不動を祈って降ろして、日本国に押しよせ、熱田明神を、降参させようとなさった時に、（熱田大）明神は、このことを天照大神に、お申しにおなりになりました。「力をあわせましょう」として、9万8千の戦神によって、お戦いになったので、大明神は、お喜びになさって、そして、7不動を奪いとって、7不動の剣と、もとの剣に加えそえて、八剣明神と、お奉りになられています。

3 教理編（『熱田宮秘釈見聞』）

3-1 迦毘羅衛国・八葉蓮華

そもそも、熱田大明神の本地は、天竺の迦毘羅衛国の主、

朱鳥(あかみとり)元年：天武天皇の15年。天武没年。厳密には改元は7月らしい。

八剣明神と：『神祇官』は、この後に「これ秘すべし秘すべし」とあり。内容が一段落した認識が存在したか？

『別傳』、以後の内容を大きく省き、「蓬莱嶋が竜宮浄土と熱田宮の門」という内容をのせる。

迦毘羅衛国：釈迦族のいた国。

『見聞』（『熱田宮秘釈見聞』の略、以下同じ）和伊露羅国に作る。

名前を仏生石といいます。高さ40里、広さ60里の岩です。その中に、八葉の蓮華の座があります。その座とは花蔵世界であります。これは五智の大日如来がいらっしゃることから、密厳浄土と名付けられています。

東方は大円鏡智、南方は平等性智、西方は妙観察智、北方は成所作智、中央は法界体性智であります。そうはいっても、衆生を化度するために、日本（国）・尾張国・愛智郡に迹を、お垂れになりました。

（東方に阿閦仏の因位は素盞烏尊です）南方・宝生仏というのはミヤズ姫です。今の氷上宮はこれです。聖観音の化身です。西方の阿弥陀と、おっしゃるのは、伊弉冊尊です。北方の釈迦如来は稲田姫、中央の大日如来は天照大神の御ことです。

今、お現れなっている、村雲剣は、天照大神の変化ともいうのです（また、熊野権現と化現なさりました）草薙剣とも名付けられています。そうなので、熊野権現、天照大神、熱田大明神は一体の分身でいらっしゃいます。

仏生石：『見聞』より用字する。
花蔵：蓮華蔵の略か？
五智：底本「五百」に作る。『見聞』『神祇官』より改める。
密厳浄土：大日如来を教主とする浄土。けがれた、この世界。
東方は……：大日如来の五智の説明。『神祇官』は東北南西中央。
法界体性智：底本「ほうかい大しやうち」に作る。『見聞』の「法界躰性智」より改め常用漢字に。
日本国：『見聞』より国を補う。
愛智：『見聞』より用字。
東方に……：『見聞』より補う。
因位：悟りをひらく前の姿。
釈迦如来：金剛界では北方は不空成就如来。
『見聞』東：阿閦－ソサノヲ
南：宝生－宮酢姫－氷上－聖観音
西：弥陀－イサナミ　北：尺(釈)迦－稲種　中央：大日－天照
『神祇官』東：阿閦－ソサノウ
南：宝生－身安姫－ヒカミ－聖観音　西：阿弥陀－伊弉諾　北：釈迦－伊弉冊　中央：大日－天照
また、熊野権現：『見聞』より。
草薙剣：『見聞』内容を欠く。

3-2 村雲剣の来歴（底本、内容を欠く）

（この）剣は国常立尊が、お作りになりました。この剣は阿波国焚山というところで、おのずと火がでて、焼けてなくなったという説もあります。実際には熱田宮で焼け失せになられて、熱田宮には留まっていなくて、（龍宮城で蛇の体に変わって、お入りになられた。）龍山寺に、お変じになられて、その時から、龍山寺と名付けられました。それから紫雲に乗って筑紫の伊吹ノ岳へ、お行きになられました。それから出雲国・肥ノ河上にいって、（山神となって悪事をおなさりになった）その時、素盞烏尊が、尊のお持ちになっていた十束剣で、お打ちとりになられた、この名を村雲剣といいます。かの十束剣は大日如来の化身、胎蔵界の大日です）

3-3 神宮寺・蓬莱嶋

熱田宮というのは、密厳浄土・花蔵世界です。素盞烏尊の本地は薬師如来です。十二所というのは、十二大観音、十二神（将）です。

「新宮なし（で）七朝、詣で」というのは、大明神が天から

底本にはないが、『見聞』『神祇官』で、ほぼ同様の内容を挿入。

国常立尊：『見聞』トヨ〔コ〕タチノと、ふりがな。

焚山：『神祇官』焼山に作る。

焼けてなくなった：『神祇官』焼けてできあがったニュアンス。

焼け失せ：『神祇官』内容を欠く。

龍宮城で：『神祇官』より補う。

龍山寺：龍泉寺か？『沙石集』2-4、68頁。『神祇官』（その時から龍泉王といいます）

紫雲：『神祇官』白雲に作る。

筑紫：『見聞』□（冫に笙）〔筑〕紫に作る。

伊吹：『神祇官』伊冨貴に作る。

山神となって：『神祇官』より。

肥ノ河上：『神祇官』日ノ河上。

素盞烏尊：『見聞』「索〔素〕サノ（ママ）尊」に作る

十束剣：『神祇官』内容に脱あり。

村雲剣：『見聞』蒸雲剱を用いる。『見聞』の指紋的用字。

十二所：『見聞』十二処に作る。

十二神将：『神祇官』より補う。

新宮なしで、七朝詣で：底本「しんくうな（ママ）し七てうまうて」『見聞』「神宮寺ニ七寺詣テ」に作る。神宮寺のことを指すも、7音7音で復元したい。

7度、お降りになって、お建てになった寺です。七仏薬師如来というのです。

かの熱田宮の池の下に、金の亀がいます。背中に大明神が、お立ちになっています。首には剣宮が、お立ちになっています。頭には源大夫殿が、お立ちになっています。尾には龍羅宮が、お立ちになっています。また、この場所の峰に池があります。9つの穴があります。熱田尾は蓬莱嶋といいます。かの明神が龍身としてうまれた時から、松后嶋というのです。

3-4 『梵網経』・日破宮・如是御前

大明神に新羅の道行が、お書きになった『梵網経』が、今でも、御宝としてあります。お経の料紙は金池という池に、7日、浸して、洗い清め、自在天の御子の護法というのに、7日、打たせて、筆を8つ持って、いっぺんに、お書きになられました。筆は象の尾です。硯の水は天竺の無熱池という池の水です。天人の感応があって、天に、お昇りになりました。天人は十二天のうちの日天子です。これは日破宮のことです。

『神祇官』頭の記述なし。
剣宮：『見聞』八剱宮に作る。
龍羅宮：底本「たつらのみや」『見聞』『神祇官』高蔵宮に作る。
峰：『見聞』「御池」『神祇官』「三井」に作る。
龍身：底本「たつみ」『見聞』『神祇官』「第三生」に作る。
熱田尾は：底本「あつたおは」。
松后嶋：『見聞』松炬嶋に作る。
この字も使うが指す場所が違う。
新羅：『見聞』（が第3生の時に大唐国にて新羅の道行聖人のお書きになられた）
お経の：『見聞』この前に（弘法大師は13生の人で、新羅の道行は弘法大師の化身(けしん)です）
金池：底本「かなち」『見聞』金明池『神祇官』金也に作る。
自在天：『見聞』大自在天子。
護法：底本「御はう」『見聞』「乙護法」『神祇官』「ヲツトヲウウ」に作る。『見聞』より用字。
無熱池：『見聞』より用字。
感応：信心が神仏に通じて。
お昇りに：『見聞』（天より降って墨を、おすりになられました）
日天子：底本「日天しん」『神祇官』「日天神」に作る。
日破宮：現在の日割御子神社。

本地は七仏薬師のなかの善名如来です。佐羅陀山の地蔵菩薩の化身であられます。

大明神の秘密の妙果を金の箱に、お納めになられました。また、道行上人の、お書きになられた『梵網経』、南方の大通智勝仏に、奉られている龍女の如意宝珠は、大明神の第3の生まれの時、お名前を得道上人として現れ、修行なさっている時の仏具、三鈷・五鈷・独鈷・鈴を金の箱に入れて、御殿の下に、お納めになりました。この箱を、獅子のヒゲと、象の尾を合わせた(縄で)うちました。うった人は、月蓋長者の娘、如是御前です。この箱は信濃国・善光寺の阿弥陀如来の因位の時の、お名前を戒授長者といいました。閻浮檀金を使って作った箱であります。くわしく聞いてみると、伊弉冊尊の本地で、いらっしゃいます。

3-5 白鳥塚の9つの穴

白鳥塚というのは、大明神の御塚(お墓)です。9つの穴があります。八葉の九尊が、おのおの住所としています。中央の穴は、大宮の御殿の下を通って、そこから駿河国・富士の頂

善名：底本「せんは」『見聞』善無月『神祇官』センイに作る。七仏薬師に善名称吉祥王如来が転訛か？
佐羅陀山：七金山の1つ。地蔵の住所。『見聞』迦羅陀山に作る。
妙果：仏のさとり。底本「みやうかには」『見聞』御財(おた)カラ『神祇官』「名号」に作る。
金の箱：『見聞』『神祇官』三重ノ金箱に作る。
大通智勝仏：底本「大しょうちしょうぶつ」『見聞』より用字。
南方の：底本『梵網経』を大通智勝仏に奉る。『見聞』より改める。
如意宝珠：願いを叶える玉。
得道：底本「とくとよ」『見聞』より用字。『神祇官』德道に作る。
三鈷…：底本「さん二(こカ)・五二(こカ)・十二れい」に作る。『見聞』『神祇官』「三古・五古・独古・鈴・印鎰ヤク」に作る。
月蓋長者：インドの富豪(ふごう)。
如是御前：『見聞』如是以〔御カ〕前
戒授：『見聞』より用字。
熱田と善光寺の関係の説明を挿入したため文意が不明瞭に。
閻浮檀金：理想とされる金。
伊弉冊：『神祇官』伊弉諾に作る。

白鳥塚：底本「しせりつか」に作る、『神祇官』ミセリ堺(サカイ)に作る。『見聞』より改める。
御塚：『見聞』御墓塚に作る。この後に（中に馬腦〔瑪瑙〕の石塔があり座は八葉です）と挿入。
八葉の九尊：蓮華の花の中央と8枚の花びらに、それぞれ神仏をあてはめる。胎蔵界的な考え方。
頂：『見聞』頂ニ有ル人穴。

にでます。（東の穴は）大宮の三井の水上の三角へつい（かまど）の石の下を通ると、奥州（の外の）閼伽の池にでます。東南のすみの穴は、八剣宮の下を通って、そこから氷上宮へでて、二村山にでます。（南方の穴は（大明神の）南海を通って、補陀落山に通じます）西南のすみの穴は、近江国の湖を通って、そこから伊勢国・大神宮の宮の、岩戸山を通ります。そこから、天竺・霊鷲山の池へ通じています。西の方の穴は、京の神泉苑の池を通ります。そこから鳥羽山池にでます。西北のすみの穴は美濃国・谷汲へ通ります。そこから白山の山中、翠の池へ通じます。北の方の穴は、信濃国・諏訪の湖へでます。そこから、ひきまわして、浅間山の頂にでます。東北のすみの穴は高蔵宮の下から、天竺・無熱池の御池に通じます。

このように（白鳥塚の穴が世界各地に）通じていることは、神変・不思議の言い伝えが多い。都の神泉苑の池で、弘法大師が（修法を）おこないになられた時に、善女龍王（があらわれて、それが）素盞烏尊の龍でした。名前を甲斐白葦毛と

東の穴は：『見聞』より補う。
三角へつい：底本「三かくへつい」。
『見聞』三角遍知院に作る。胎蔵界曼荼羅の東に遍知院があって、中央に三角を配置する。清水社の楊貴妃（ようきひ）の墓とされている物？
三井の水上：『見聞』御井池南。
の外の：『見聞』より補う。
閼伽：『見聞』阿伽に作る。
八剣宮：底本「は（ママ）るきのみや」。『見聞』より改める。底本「八（つ脱カ）るきのみや」だよね。
二村山：豊明市前後付近にある山。『見聞』内容を欠く。『神祇官』二村山から伊勢大神宮の手前まで欠く。
南方の…：『見聞』より補う。
西南…：『見聞』水海（みずうみ）→居醒泉（サメカヰ）→伊勢大神宮→高野奥院→天竺山。
神泉苑：『見聞』神手池『神祇官』神泉ノ渕ノ池に作る。
白山：『神祇官』立山に作る。
翠の池：翠ヶ池、白山の火口湖。『見聞』青に作る。
ひきまわして：『見聞』南宮を経由。
浅間山：『神祇官』冨士浅間に作る。ここは長野・群馬県境の浅間山か。
高蔵宮：底本「たかくらへ（ママ）みや」。『見聞』より改める。
神変：人間には理解できない神のしわざ。『見聞』『神祇官』とも欠く。
善女龍王：底本「によりうわう」『見聞』より補う。『見聞』『神祇官』ともに、この後に善女龍王の熱田への参詣を挿入する。底本、脱あるか？
甲斐白葦毛：『見聞』より用字。底本「かいしろしあし」。『神祇官』カケノ白足毛に作る。馬の（毛並みから連想される）名前っぽい。

いいます。

3-6 神宝

また、ミヤズ姫が、お持ちになっていた唐の鏡（で）8寸（のもの）があります。この鏡は、稲種公が、お作りになられました。大自在天の舞の装束は乾(北西)のすみに、お納めになられました。八剣宮の石の下に鏡があります。厚さ3寸で、これを神鏡といいます。熱田の前の海にあるのだともいいます。八剣宮というのは、村雲剣、十束剣、草薙剣、東国の夷が、この剣で、平定されました。鬼を殺した剣を蓮切と名付けました。（蓮切が、なまってヤツルギとなりました）また、五智をあらわした、蘇合の錦が大宮の巽(東南)にあります。素盞烏尊が、お持ちになっていた、如意の珠は、檔の木の下に、お納めになられました。大明神が東国の夷を平定して、お下りにおなりになった時に、伊勢大神宮より、おもらいになられた、火打ち（石）は日破宮の石の下にあります。

3-7 本地仏

そもそも八頭の大蛇というのは、熊野権現の化身です。

稲種公：底本「いなねのきみ」。『見聞』稲種尊。『神祇官』イナタヒノに作る。ミヤズ姫の兄。
お作りに：底本「うち」『見聞』『神祇官』鋳るに作る。熱田の人が作ったのでは唐の鏡にならない。
3寸：『見聞』広六寸と、つづける。なんかデカい。
海にある：『見聞』「云説アレトモ非説也」としめる。『神祇官』熱田の海の内容を欠いて、八剣宮の鏡と唐の鏡を同一視する。
八剣宮というのは：『見聞』前段に（この大明神は大峰に、お生まれになりました。よって、そのところの名前から仏生石というのです）を挿入。
鬼を：『見聞』前段に（豊前前司という人が母を鬼にとられた時に、熱田大明神に祈誓(きせい)して）を挿入。
蓮切：『見聞』ノソハエに作る。私の用字。
蓮切が…：どの本も明確な理由がないので、復元的に付加。
五智：底本「五百」に作る『見聞』『神祇官』より改める。
蘇合の錦：蘇合という雅楽の衣装。あるいは、いい匂いのする豪華な着物。『見聞』織(ヲリ)顕ル錦『神祇官』濁ノ江ノ錦に作る。
檔：翌桧(アスナロ)。栴檀(センダン)の古称とも。『見聞』年上(アケ)ノ『神祇官』アケノに作る。私に用字する。
日破：底本「ひかり」に作る。『見聞』『神祇官』より改める。

八尾、八識、十六の目は、十六大菩薩の知恵の眼です。

8尾*とは、8人の童子（です）。大宮の御本地は五智如来、八剣宮は不動、高蔵は毘沙門天王、日破は地蔵、氷上は聖観音。大宮は4面8手といって、お顔が四方にあって、お手が8つあるのです。

3-8 熱田宮の門

南の門は海蔵門と名付けられてます。この場所は龍宮城になります。東の門は春敲門で、薬師の浄土・浄瑠璃世界の西門にあたります。西の門は西方浄土（の東門）で、阿弥陀如来の世界。すばらしい都の門で、大明神の、お入りがあって、この門で、帝都を、お守りになることから、鎮皇門というのです。5月5日の祭礼が、これです。本当に、立派な御ことです。京の内裏にも5月は熱田大明神の、お印で、春興殿の祭がこれです。

3-9 深秘

そして、この場所は常寂光の地とも、また密厳(浄土)・花蔵世界ともいいます。そうなので、霊験は、ほかの社より、

八識：底本「八しき」『見聞』八識、『神祇官』八色。『見聞』から用字も八敷（蛇の体の数え方）が適当？
8尾：『神祇官』八臂に作る。
童子：『見聞』『神祇官』この後に（剣というのは本（地は）寂光の城に座っていて、五智の中台で法界体性智の剣(化身)です）を挿入。
聖観音：『見聞』『神祇官』この後に（源大夫殿は文殊（師利菩薩）、大福田は虚空蔵、紀大夫殿は十一面観音、青衾(あおぶすま)は千手観音）。
大宮は……『見聞』「大宮四面八町」『神祇官』「大宮四八手」。『見聞』の「大宮四面八町」は熱田宮の門に？。南の門：『別傳』の教理編は、これのみ。前段に（熱田宮をば、蓬莱嶋ともいいます。龍宮浄土ともいいます）海蔵門：『神祇官』戒藏門。
春敲門：『見聞』『神祇官』『別傳』ともに名前を欠く。扁額は熱田の神宝。浄瑠璃世界の西門：『神祇官』『持』この後に（東（国）の夷の乱れを、おおさめになっています）を挿入。
の東門：『見聞』『神祇官』『別傳』より補う。『見聞』この後に（また寂光の浄土です）を挿入。以後内容を欠きしめの言葉。
鎮皇門：底本「ちうもん」中門とも考えられるが『見聞』『別傳』より改める。『神祇官』鎮星門に作る。
立派な：『神祇官』も内容はここまで、しめの言葉に。
お印：底本「御はん」
春興殿：底本「しゆかうてん」准后(じゆごう)殿とも考えられるが春興殿は内侍所を納めるので仮に用字する。
密厳浄土：『神祇官』より補う。

すぐれています。1度参詣した衆生は一念信心をおこすものです。御利生を受けないということがありません。大悲の、お誓いが、あまねく（ゆきわたってい）て、本当に立派なことです。

神（様）は本地（仏）を明らかにすることは、お喜びになるとはいっても、これらのことは、比べるものがない深秘です。これを語る者は、垢離をおこなって、信心を、いたさないと、御罰があたります。卒爾に読んで人にも聞かせてはいけない。（熱田宮を信じる）心のある人に聞かせるべきです。様子もしめさない人には無益です。返す返す、深秘であります。秘すべし、秘すべし、秘蔵、秘蔵。あら、おうてや、おうてや。

『熱田宮秘釈見聞』の深秘。

（あなかしこ、あなかしこ。他人に見せず、秘すべし、秘すべし。熱田宮の秘釈）

〈あなかしこ〉

一念信心：底本「一ねんしんし」。『神祇官』『別傳』より改める。
利生：神仏の利益(りやく)。『神祇官』『別傳』以後欠く。
垢離：世俗のケガレを落とすこと。水垢離(みずごり)。
卒爾：注意や配慮もなく軽率に。
無益です：底本「むやく(ママ)よし」
おうてや：底本「おうてや(ママ)字義未詳。「仰(おお)せや」なのかも？
底本最後に「(以下紙葉欠損)」とあるも、類書も内容はここまでなので、底本も内容的には、ここまでか？
あなかしこ：なんと、おそれおおくも。手紙の書き終わりにも用いて、前の文章に格調(かくちょう)をあたえる字句。
秘釈：秘密(ひみつ)の解釈(かいしゃく)。

バタフライ・エフェクト～〈中世日本紀〉私鈔～

バタフライ・エフェクト

バタフライ効果というのは、アゲハ蝶の羽からでる、わずかな風が、台風のような大きな現象の原因になっているのではないかという、いわゆるカオス理論でいわれる、たとえ話です。カオス理論というのは、その現象が簡単な数式であらわされるとしても、次の状態が予測できない－予測できないことから混沌（はっきりしない様）を意味するカオスというのです－ような状態を研究するためのくくりです。

厳密にはカオス状態ではないのですが、かんたんな、たとえ話にすると、Bの廻りをまわるCをA地点から観測する時、Cは大きくなったり、小さくなったりしながら、左右を行き来しています。しかし、BがAの廻りをまわりだす（相対的には、AがBの廻りをまわっても同じことなのですが）と、Cの動きは複雑になります。BがAの廻りをまわっているので、CもAの廻りをまわって、大きくなったり小さくなったりするのは同じですが、Aの廻りをまわる速度は、速くなったり遅くなったりします。少しカオス(混沌)が、体感できるのではないでしょうか？

夜の空の星座が、ボールを半分にわった半球を内側から見ているように、規則正しく動くのに、その中で、変わった軌跡をえがく星があります。まどわす（惑）星とかいて惑星とよびます。

カオス理論やバタフライ効果も、おこる現象は、次の状態が予測できない複雑なことですが、実際は簡単な数式で表現できてしまったりするのです。

日本の中世には、「日本紀に曰く」として、歴史書（『日本書紀』に代表される日本紀）に書かれいることとして、まさにカオスのようなさまざまな神話が語られます。そのように中世に書かれた歴史書に裏打ちされたとする神話を〈中世日本紀〉とよびます。『熱田の深秘』も代表的な〈中世日本紀〉と考えていいと思います。それは『熱田の深秘』が『平家物語』のネタ本として、引用されているという点1つとっても、『熱田の深秘』が、現代の感覚で、昔ばなしとしての神話の、おもしろい（特殊な）1類型というだけではなくて、中世の人にとっては、日本を揺り動かした源平の争乱の原因や結果としてのリアリティーのある解釈の1つと考えられていたのです。

ちなみにカオスというのは、ギリシア神話に登場する、天地開闢の最初の神様の名前でもあります。『熱田の深秘』の解説を、カオスをみちびく、効果と名付けたのは、そういうことです。

熱田神話研究所

平安時代に書かれた『古語拾遺』の巻末に「遺りたる」として、いくつかのことが書かれています。その第一は、このような内容です。

「いはんやまた、草薙神剣は、本当に、これは天璽である。日本武尊が（東夷征伐を）終わらせて、お帰りになった年に、（草薙神剣は）留まって、尾張の熱田社にある。外賊が、ぬすんで逃げたのだが、境を出ることができなかった。神物の霊験というのは、こういうこととして観るべきだ。そうであるので、奉幣の日には、（宮中の内侍所の鏡と）同じように敬って、まつるべきだ。しかしながら、昔から（リストから）もらして、その祀をおこなっていない。もれている第一です」『古語拾遺』岩波文庫46頁

『熱田の深秘』でも、ヤマトタケ尊が、ムラクモ剣を尾張にもたらしたことは語られますし、外賊は道行法師だと、すぐに理解できます。このようなことが、はたして、尾張・熱田からの陳情なしに中央だけで発想できたのでしょうか？

尾張に関する記述は『古語拾遺』だけにとどまりません。同じく現在では平安時代くらいに書かれたとされる『先代旧事本紀』では、「天孫本紀」の前半部分で、熱田神宮の神官をつとめる、尾張氏の系図を祖神とされる天火明命から、天香語山命を経由するカタチで語っています。

平安時代になって、尾張氏や熱田神宮の力関係が変わって、そういう陳情がなされるようになったかというと、どうも、そうでなく、『古事記』の内容にも、倭建命は登場します。それに『古事記』の選者とされる太安萬侶の、父とか伯父と目される、多品治が、壬申

の乱の時に美濃国にいたことは知られていることですし、愛知県・一宮市には於保という地名があり、ともすれば、上巻のアウトラインも、尾張に原型があったモノを安萬侶が援用したことも考えてもいいのかもしれません。

そのことに関連するのか『上宮聖徳法王帝説』のような、奈良県に古くから残っている文献には、『古事記』や『日本書紀』とは異なるというか、この2つの本を補助するような内容が書かれているといわれます。このことも、中央だけでなく、神話のセンター（中央）が、東国というか、熱田に存在していて、中央の豪族の神話とも、つりあうようにアウトラインを作りあげていたのではないでしょうか？

よく、熱田神宮関係の資料というと「古いモノは「熱田宮寛平縁起」しかみるべきはない」というような言われ方をしますが、日本最初の神話『古事記』や、太安萬侶も編さんに参加したとされる『日本書紀』、その後に『日本書紀』を補助するようなカタチでつくられた『古語拾遺』や『先代旧事本紀』にいたるまで、古代（律令期）を通じて、熱田系のテキストは、つねに中央の神話世界に、コミットしていたと考えられます。そして、熱田神宮の資料が原型だと思われる神話の特徴は、例えば『日本書紀』のような原典に、そくして、それを補助するような資料を提供するのではなく、それ以前のテキストとは明確に異なる内容をふくんでいることです。そのことは熱田神宮が都にたいして、近くて遠い（中国・中部）国だから、積極的な、神話の改編がおこったのかもしれません。

『熱田の深秘』の内容・荒筋

神代

では、ここからは『熱田の深秘』について、今回、現代語訳のために立てた小見出しにそいながら、荒筋をみていきましょう。

まずは以前は「神道由來の事」と呼ばれていた「神代(1)」の内容について。一般に、日本の神話として知られていている、アマテラス（音読みでテンショウダイジンと呼ばれます）スサノヲ、イザナギ・イザナミの登場する、少し変わった物語です。注意しておくことは、海幸彦・山幸彦で知られる『日本書紀』で「神代下」と呼ばれる日本神話の後半がまったく語られず、天岩戸が変質したと思われる、〈第六天魔王譚〉までで終わっています。

最初に天神7代・地神5代と語りますが、地神については、天照大神が登場するだけで、そのほかは割愛されています。天神も名前が見えるのは伊弉諾・伊弉冊だけです。伊弉諾・伊弉冊の指しおろした天逆鉾によって葦原国が誕生し、大日如来が座っていたことから大日本国と名付けられました。（天逆鉾・国号の由来(1-1)）

熊野権現・天照大神・白山権現・恵比須・出雲大社という、現在、おがまれている神様は父子であるとされます。その理由は、伊弉諾・伊弉冊がセキレイという鳥の動きをみて4人の子供を、お産みになりました。天照大神、月読＝丹生大明神、蛭子、（素盞烏＝出雲大社）がそれです。蛭子は龍王に守護され海の神様になりました。（鶺鴒・三貴神の誕

生・蛭子(1-2)

素盞烏は不満をつのらせて、天照大神と夫婦となろうと考えたのですが、天照大神は大蛇になって逃げてしまいます。素盞烏は戦をしかけますが、丹生大明神を大将軍にした天照大神の軍勢に敗れてしまいます。「ちはやぶる」という枕詞がうまれました。(天岩戸・和歌の初め・高天原と出雲(1-3))

天照大神は、垂仁天皇の時に伊勢神宮の内宮としてあらわれました。皇太神というのは外宮で、天照大神の親方であります。内宮・外宮は両界(曼荼羅)の心持ち・場所で、天照大神と大梵天王であります。(伊勢神宮、内宮・外宮のいわれ(1-4))

熊野権現は伊弉諾で、天照大神に国土を譲ってから、天竺の摩訶陀国の大王におなりになってから、紀伊国音無川のそばに迹をお垂れになりました。白山権現は伊弉冊で、(山野を三輪明神に譲ってから)百済国の大王となった後、北陸道の白山権現になりました。(熊野権現・白山権現(1-5))

ヤマタノヲロチとは語られないのですが、大蛇が登場して、素盞烏が手名槌・脚名槌と出会って、娘の稲田姫と結ばれます。十束剣を使って大蛇の尾から、取り出したのが天村雲剣で、天村雲剣と鏡を天照大神に献上したことで、10月を出雲では神在月というようになりました。(天村雲剣・神在月(1-6))

用明天皇の時に、空から芥虫がふってきました。最初は鉄を喰っていましたが、その

うち人も喰うようになり、結局、朝敵になりました。人間では、どうしようもなく、ツキメ・カシキメを宮へ使わすことで、天照大神に助けをもとめました。芥虫の骨が磁石だといわれます。（芥虫(1−7)）

第六天魔王が日本に仏法が広まるのを恐れて、その間は大紅蓮でした。天照大神が「仏法のぶの字も言わない」と約束をして、第六天魔王から日本を取り戻しました。日本の絵地図と、そこに押した判印を神璽というのです。また「あら、おもしろ」という言葉もうまれました。（第六天魔王・神璽の由来(1−8)）

皇代

「あつたのしむひ」は前半の「皇代(2)」と後半に分割しました。まあ、歴代天皇の治政をならべて記述しているのではなくて、熱田宮の縁起としての日本武尊の物語に、八幡大菩薩の記述が、つけくわえられているようになります。

神武天皇は最初の天皇です。仲哀天皇が新羅のために亡くなられると、后の神功皇后は新羅を攻めようとします。その時、八幡大菩薩は神功皇后のお腹の中にいましたが、3年間、お腹の中にとどまられました。伊勢大神宮から魂と魄という荒御前をさづかりました。

（八幡大菩薩（胎中天皇）(2−1)）

景行天皇の時代、東国の夷が乱れていました。天皇の皇子の日本武尊は宣旨にしたが

って東国へ行かれました。伊勢大神宮で剣をいただき、熱田の松后嶋で3年とどまられ、東国を平定してからも3年間とどまられ、ミヤズ姫に剣をさずけて、尊は都へもどられました。（日本武尊・東征・ミヤズ媛(2−2)）

日本武尊が伊吹山のすそのを通ると、伊吹明神が大蛇となっており、尊は大蛇の爪に当たり、体を冷やすために醒ヶ井へ行き、とうとう千の松原で伏せてしまいました。そのことを聞きつけたミヤズ姫は千の松原へやって来ました。このことにより東のことを吾妻と呼ぶのです。（伊吹大明神・醒ヶ井・千の松原(2−3)）

日本武尊が亡くなると、1羽の白鳥となり、熊野を経由して、松后嶋へ、まいもどられます。戦の旗印にとまったので旗屋、白鳥になってやって来たので白鳥塚といいます。（白鳥伝説(2−4)）

この時は5月だったので、紀大夫が田植えをしていると、その田を聖がお求めになられて、一夜のうちに千本の林になりました、そこが剣明神です。ミヤズ姫が日本武尊からさずかった剣から火がでて、最初は焼け田と呼んでいましたが、熱田と呼ばれるようになりました。（奉斎(2−5)）

熱田大明神の、お持ちになっている剣は愛染明王の三昧耶形です。この剣の光は、天上・地下・東西南北を照らします。剣の光は成仏の手助けになります。（三昧耶形(2−6)）

新羅の帝は道行法師に熱田大明神の剣を盗るように命じます。道行法師は剣を袈裟に包んで筑紫の博多までやって来たところで、住吉（大明神）に殺されてしまいます。新羅の帝は腹を立て、天竺の生身の7不動を日本に攻めさせます。熱田大明神は7不動を奪いとって、不動の7本の剣と、もとの剣で八剣明神というのです。（道行法師(2-7)）

教理編

「あつたのしむひ」の後半部分を、今回は「教理編（『熱田宮秘釈見聞』）(3)」としました。これまでの神代、皇代が時間軸に重点をおいて物語が語られていたのにたいして、教理編では、仏教的な考え方による熱田宮の解釈と、実際に熱田宮にあるモノを中心に物語が語られます。また、ほぼ教理編と同様の内容を持つ『熱田宮秘釈見聞』という書物もあり、広く知られています。教理編は神代、皇代以上に内容が、むつかしいので、急いで読もうとせずに、神代、皇代の理解を先に進めた方がいいかもしれません。

熱田大明神の本地は天竺の迦毘羅衛国の仏生石で、花蔵世界・密厳浄土です。（東方-阿閦仏-素盞烏）南方-宝生仏-ミヤズ姫-氷上宮-聖観音、西方-阿弥陀-伊弉冊、北方-釈迦如来-稲田姫（稲種とも）中央-大日如来-天照大神です。村雲剣は天照大神の変化で、（熊野権現とも化現していて）草薙剣ともいうのです。ですから熊野権現・天照大神・熱田大明神は一体の分身なのです。（迦毘羅衛国・八葉蓮華(3-1)）

「あつたのしむひ」では語られませんが、『熱田宮秘釈見聞』には、こんな物語が、つけくわえられています。（村雲）剣は国常立尊が作ったのですが、熱田宮で焼けてしまって、残っていません。（龍宮城に蛇の体になっていたこともあります）龍泉寺になられたこともあります。出雲の肥の河上で、素盞烏尊に十束剣でうちとられました。十束剣は胎蔵界の大日如来です。（村雲剣の来歴（底本、内容を欠く）（3−2））

素盞烏尊の本地は薬師如来で、神宮寺は（熱田）大明神が7回生まれ変わって、お建てになった七仏薬師です。熱田宮は亀の上にあって、背中、首、頭、尾に、それぞれ社が建っています。熱田を蓬莱嶋、松后嶋というのです。（神宮寺・蓬莱嶋(3−3)）

道行の書いた『梵網経』は熱田宮の、お宝です。日破宮は日天子です。本地は七仏薬師。地蔵菩薩の化身です。『梵網経』と如意宝珠、大明神の使っていた密教法具は金の箱に入れて御殿の下にあります。この金の箱は信濃の善光寺如来の如是御前のところにあり、閻浮檀金を使っています。伊弉冊尊の本地です。（『梵網経』・日破宮・如是御前(3−4)）

白鳥塚には9つの穴があり、日本各地や天竺につながっています。神のしわざなので不思議なことが多いです。神泉苑で弘法大師が（修法）をされた時に、善女龍王があらわれ、素盞烏尊の龍でした。甲斐白葦毛といいます。（白鳥塚の9つの穴(3−5)）

ミヤズ姫の持っていた鏡は稲種公が作りました。舞の装束は西北のすみに、八剣宮の

石の下に神鏡があります。蘇合の錦が大宮の東南にあります。素盞烏尊の如意の珠はアテの木の下に、火打ち（石）は日破宮にあります。（神宝(3−6)）

八頭の大蛇（ヤマタノヲロチ）は熊野権現の化身です。十六大菩薩、八童子です。大宮の本地は五智如来、八剣宮は不動、高蔵は毘沙門天王、日破は地蔵、氷上は聖観音。大宮は顔が四方にあって、手が8つあります。（本地仏(3−7)）

南門は海蔵門で、龍宮城の入り口です。東門は春敲門で、薬師如来の浄土の西門で（夷の乱れをおさめています）西門は西方浄土（の東門）で大明神が都に行き来することから鎮皇門といいます。5月5日に春興殿でお祭りがあります。（熱田宮の門(3−8)）

（熱田宮は）常寂光の地で、密厳（浄土）・花蔵世界です。1度でも参拝すれば御利益にあずかれます。神様の本地仏を明らかにすることは、（神様が）お喜びになりますが、深秘です。語る者は身を清め、軽率に読んで聞かせてはいけません。（深秘(3−9)）

『熱田の深秘』の〈構造〉

伊勢からの需要

ここからは、『熱田の深秘』の〈構造〉というか、『熱田の深秘』の成立や、『熱田の深秘』が読みつがれていくこと（流布）を考えるうえで、指紋になりそうな特ちょうについてみていきましょう。

まず、最初に、（天逆鉾・国号の由来(1-1)）と（第六天魔王・神璽の由来(1-8)）が、同じテキストの中に混在している点です。一般に、日本になる場所に「大日如来の印文」があって、そこから「大日本国」という日本の国号になったという説話が、発展するカタチで第六天魔王の登場する、日本を仏教国にしようとする神様と第六天魔王が日本を、うばいあう〈第六天魔王譚〉と呼ばれる説話が成立しているのではないかといわれます。たとえば貞慶という南都（現在の奈良）のお坊さんの書いた『愚迷発心集』には「日本國名義」（『愚迷発心集』岩波文庫34頁）という項目があって（天逆鉾・国号の由来(1-1)）とよく似た内容が語られ、「社家の説」であるとされます。社家というのは、仏教関係者を釈家（釈迦の擬似的な家族の意味）と呼ぶのに対応する、神社・神道関係者の意味で、貞慶が神社で神官から、見聞きしたことを連想させます。一方で名古屋市矢田・長母寺の無住の書いた『沙石集』には、第1巻の第1に「大神宮の御事」として、〈第六天魔王譚〉が語られます。こちらは、具体的に伊勢の大神宮で見聞きした話だと語られています。

神社や社家が語る内容として「国号の由来」とか〈第六天魔王譚〉のような話が広く知られるようになると、逆に「本当の話はどっちなんだ？」というような疑問が、うまれたのかもしれません。そのような疑問を解決するためには、同じテキストの中に2つの内容が混在するテキストが必要になったのかもしれません。

（天村雲剣・神在月(1-6)）の中に、稲田姫に父母が黄楊の櫛をおくるシーンが登場します。その中で櫛を、うしろざまに、投げることを不吉なこととして禁じています。似たように風習に、伊勢大神宮に使える斎王が都から斎宮へ向かう時に「別れの御櫛」という儀式をおこないます。（芥虫(1-7)）では、もっとダイレクトに、芥虫という〈国難〉に対して、清らかであることを象徴するツキメ（斎女の転訛でしょう）と、かしこまること、機転のきくことを象徴するカシキメ（賢女のような字を書いて、かしこまる女という意味では？）が、伊勢大神宮に使えることで解決したとされます。（厳密にはツキメ・カシキメの名前が登場するのは『神祇官』）

伊勢の斎王は現代のように交通手段が発達していない時には、都からは、はるか遠く、離れていると考えられたのでしょう。そのような場所へ、年端もいかない皇族の娘さんと、それをサポートする良家の子女が、それこそ、当時の祭儀は国家の安定をたもつためのカスガイのような存在で、大きな使命が、のしかかっています。使命の大切さを説話的に説明すること、個人的な思いはあっても、それを外へ行為としてあらわすことへの、いましめというのは、斎王に対する、教育的な部分で、重要な役割があったことを想像させます。

（伊勢神宮、内宮・外宮のいわれ(1-4)）でも、伊勢大神宮について語られます。熱田系のテキストが、熱田神宮だけに限定された物語ではなくて、地理的に近くて、熱田系テキ

ストでも、その共通性が語られる伊勢大神宮の物語を多くふくむのは、伊勢からの需要があって、熱田系テキストが供給されたからかもしれません。

つけたり

厳密には『熱田の深秘』ではなく『別傳』（『熱田の深秘』をより漢文調に書きかえたテキストの1つ）の内容なのですが、（鵜鴒・三貴神の誕生・蛭子(1-2)）で、胡御前という、漢字が使われています。胡と書いて「えびす」と読ませる神社は、現在もあるようですが、個人的に気になるのは、多賀大社の近くに敏満寺という、今はなくなってしまったお寺（廃寺）があるのですが、その境内社を、胡宮神社といいます。多賀大社は、イザナギ・イザナミを祭神としてますし、多賀（高）大社、地名の高宮、胡宮神社も高宮を「こうのみや」と読んでそれが、つづまった言葉ではないかとも説明され同じ神様ではないかとされますが、やはり、胡宮神社の「胡」の字は特殊で『別傳』のような物語を頭に入れておく必要があるのかもしれません。なにより、イザナギ・イザナミを祀る多賀大社の近くに胡宮神社があることが気になります。

（熊野権現・白山権現(1-5)）では、熊野権現については『熊野の本地』のような、別のテキストを意識して、摩訶陀国の大王とされているのかもしれませんが、白山権現がイザナミで百済国の大王というのは他では、あまり見ません。現在でも白山神社の中にはイザ

ナミを祭神にする神社が少なからずありますが、現在、一般に白山神社の祭神というと菊理媛命とされることが多いです。1説には、菊理媛命の「くくり」も高句麗の転訛ではないかともいわれ、北陸の環日本海的な視点から、白山権現の祭神に朝鮮半島由来の神様を配置したのかもしれません。龍脈と言って、山伝いに龍が行き来するという考え方も関連するのかもしれません。

また、現在、日本各地にある神社について『古事記』『日本書紀』に記された記紀神話の神様を配置してあることが多いですが、白山権現を代表例として、もともとは○○神社というのは「○○神」という神様を祀る「社」であると考えるのが適当（無理に記紀神話の神様を、当てはめるのは少し新しい考え方なのかも？）なのかもしれません。逆に、熱田神宮は古くは「熱田社」「熱田宮」と呼ばれ呼称に「神」の字が入りません。こういう場合は、熱田大神という神様が祀ってあるのではなく、熱田にある神社と考えるのが適当という考え方もあります。熱田神宮は古くは尾張氏が神官をつとめ、尾張氏は古くからヤマトの葛城氏や皇室とも関係があったので、祭神に対して複雑な思いがあったのかもしれません。まあ、『熱田の深秘』には、すでに熱田（大）明神というカタチで、熱田大神に対応する尊格が設定されています。ただ、熱田大明神が具体的に、記紀神話の、どの神様にあたるのかを読み解こうとすると、はっきりせず、五智如来であるという、本地仏だけがしめされているようにも見えます。さらに、○○神社について書かれた古い文献を調べてい

くと「○○神社の神様は△△という仏様です」という記録が一番古い記述であることも少なくありません。

伏線

伏線というか「神代」の（天岩戸・和歌の初め・高天原と出雲(1−3)）では、天照大神が、ひきいるのを「9万8千の戦神」としています。同じように「皇代」の（道行法師(2−7)）の後半部分では、生身の7不動と戦うのも天照大神の「9万8千の戦神」です。9万8千が、どこから来る数字なのか、よく分かりませんが、天照大神のひきいる戦神が9万8千であることは、テキストの中で共有されています。しかし、「皇代」の（道行法師(2−7)）では、道行のことを一貫して「道行法師」と記しているのに対して、「教理編」の（『梵網経』・日破宮・如是御前(3−4)）では、「道行」と呼びすてにしたり、「道行上人」という言葉も使われます。必ずしも、道行法師のキャラクターが安定しているとはいいにくい状況です。道行法師というのが、僧であっても、新羅から熱田宮の剣をうばいに来る悪役であるので、一定の人格が形成されにくいという側面も考えないといけませんが、神代と皇代が比較的、親和性の高いテキストであることと、教理編が、神代・皇代と少し離れたところで、成立して、内容の難解さから、神代・皇代との語彙のすりあわせが、十分でなかったのかもしれません。

複層性

教理編の成立の複層性を考える時に、「皇代」の（三昧耶形(2-6)）の内容は、興味深く感じます。後段の（道行法師(2-7)）と内容が入れかわっていれば、ともすれば（三昧耶形(2-6)）から、教理編に入ったと考えても不自然ではありません。しかし、教理編とほぼ内容の重なる『熱田宮秘釈見聞』には、（三昧耶形(2-6)）の内容は出てきません。

このことから、神代・皇代の原型が成立した段階で、教理編を、さらに、つけたすようなことがおこなわれ、（三昧耶形(2-6)）が（道行法師(2-7)）の前段に挿入され（（道行法師(2-7)）の取りあつかいも、皇代の中で特殊だったのかもしれません）そのままになってしまったのかもしれません。仮に『熱田宮秘釈見聞』が先に成立していて、そこに神代・皇代が付加するカタチで『熱田の深秘』が成立したとすると、（道行法師(2-7)）の動機を（三昧耶形(2-6)）が説明しているにしても、（三昧耶形(2-6)）の内容は、教理編に取り込まれるのではないでしょうか？　個人的には『熱田の深秘』の教理編を独立するカタチで『熱田宮秘釈見聞』が成立したと考えます。前段に書いてあったことなので、（三昧耶形(2-6)）が『熱田宮秘釈見聞』に、取り込まれることはなかったのではないでしょうか？

といいつつ、『熱田宮秘釈見聞』には、さらに複雑な部分があります。（村雲剣の来歴（底本、内容を欠く）(3-2)）という『熱田の深秘』には欠落している個所があることです。

内容は、他の教理編よりは神代に近いのですが、神代よりも教理編に近い（あたりまえか？）内容です。記紀神話で語られることのない、ヤマタノヲロチの尾の中に、なぜ、剣があったのかの理由の説明になっています。個人的には『熱田宮秘釈見聞』が、独立して流布していく中で、神代的な説明が必要になって、付加された部分だと考えます。『神祇官』にも、同様の内容があるので、本当は、もう少し複雑になるのですが。逆に、もともと、教理編には（村雲剣の来歴（底本、内容を欠く）（3−2）の内容があって「あつたのしむひ」だけが書き忘れたという考え方もあるのかもしれません。（個人的に採用はしませんが）また、『神祇官』と『熱田宮秘釈見聞』の間にも、テキストの差異があります。ケアレスな脱の部分もあるのですが、個人的には、『神祇官』の内容が古くて、『熱田宮秘釈見聞』の方が、熱田宮炎上のような、熱田神宮に関するクライシスの後で、宝剣がないことが、逆に真実性にせまっているというような、より教理的な内容になっていて、はっきりと「熱田宮で焼け失せになられて、熱田宮に留まっていない」と言い切ってしまっている感じがします。

まあ、『熱田の深秘』と『熱田宮秘釈見聞』で、受け継がれている内容もあれば、受け継がれない内容もある。『熱田宮秘釈見聞』には、『熱田の深秘』では語られない内容も、ふくまれているという、ともすれば、なんでもありな状態になっているので、さまざまな考え方があっていいのだし、まだ、十分に説明されていないことも多いように思います。

複層性2

ここからは、教理編について重点的に見てゆきましょう。教理編の内容については、似たような内容が、飛び飛びにでてくることが指摘できます。まず、（迦毘羅衛国・八葉蓮華(3−1)）で仏生石に八葉蓮華があるとし、この八葉と中央の1を合わせた、9という数字が（白鳥塚の9つの穴(3−5)）として、白鳥塚と熱田神宮の社殿、日本や世界各地とつないでいます。まあ、八葉蓮華に9尊という発想自体は、密教や密教に影響を受けた両部神道（金剛界・胎蔵という2つの世界(両部)が密教の基本で、それを背景にした神道）では普通になされるのですが、位置を飛び越えて語られるのは、複層性というか、他の逸話が、間に挿入されている可能性がうかがえます。同じように（白鳥塚の9つの穴(3−5)）では、穴を通るという、地下をイメージする話ですが（神宮寺・蓬莱嶋(3−3)）でも、熱田神宮の地下に亀がいて、9つの穴があるとされます。（村雲剣の来歴（底本、内容を欠く）(3−2)）は『熱田の深秘』には、ない内容なので、（迦毘羅衛国・八葉蓮華(3−1)）と（神宮寺・蓬莱嶋(3−3)）は続きのように感じますが、内容を見ると、（神宮寺・蓬莱嶋(3−3)）の前段には神宮寺の内容が挿入され、厳密には続きになりません。

逆に言えば、（『梵網経』・日破宮・如是御前(3−4)）と（神宝(3−6)）は、同じように熱田神宮にある神宝を説明している内容ですが、間に（白鳥塚の9つの穴(3−5)）が挿入

されて複雑にされています。どちらかというと（『梵網経』・日破宮・如是御前(3-4)）は説話的に神宝について説明していて、具体的な社殿については補足的ですが、（神宝(3-6)）は、社殿のどの位置に、なにが納められているかが重点になっていて、違うといえば違うのですが、やはり（白鳥塚の9つの穴(3-5)）が入るのは不自然です。

（迦毘羅衛国・八葉蓮華(3-1)）と（本地仏(3-7)）も神様に仏様をあてているという意味では内容が同じです。違いは（迦毘羅衛国・八葉蓮華(3-1)）が八葉蓮華の中の五智如来の5仏に神様を配置する、観念的なのに対して、（本地仏(3-7)）は、五智如来は大宮に配置して、それぞれの社殿の神様が、どの仏様かを配置しています。日破宮は（『梵網経』・日破宮・如是御前(3-4)）で、その詳細が語られ、氷上宮は、（迦毘羅衛国・八葉蓮華(3-1)）と（本地仏(3-7)）で2重に語られます。

『別傳』で翻刻されている教理編は、（神宮寺・蓬莱嶋(3-3)）というか、「熱田宮をば、蓬莱嶋ともいいます。龍宮浄土ともいいます」という1文の後に（熱田宮の門(3-8)）と（深秘(3-9)）を配置するようなカタチ（厳密には『熱田の深秘』と異同があります）になっています。教理編の成立の複層性をしめしているのかもしれません。

教理編、成立の背景

教理編の成立について、大きく2つのことを、まず考えるべきだと思います。まずは、

教理編が唱導された現場です。神代・皇代に比べて、熱田神宮の社殿にたいして、くわしく語っているので、熱田神宮に参拝に来た人に直接語ったのではないでしょうか？　熱田神宮には、さまざまな社殿があり、鳥居をくぐり大宮に、たどりつくには順番があり、その順番や、別の参拝者を避けるために語られる順番が前後したことから、内容が飛び飛びになったテキストが成立したのかもしれません。また、熱田神宮や神官の家系の家には「古絵図」と呼ばれる、熱田神宮の境内を、えがいた絵図面（参詣曼荼羅と総称されることもあります）が、いくつも伝わっています。中世や近世に、えがかれた参詣曼荼羅は「絵解き」と呼ばれる、節回しをつけた解説をくわえて、1種の芸能として楽しまれていました。教理編については、そのような境内を案内することや、絵解きの〈現場〉を頭においておいた方がいいと思います。

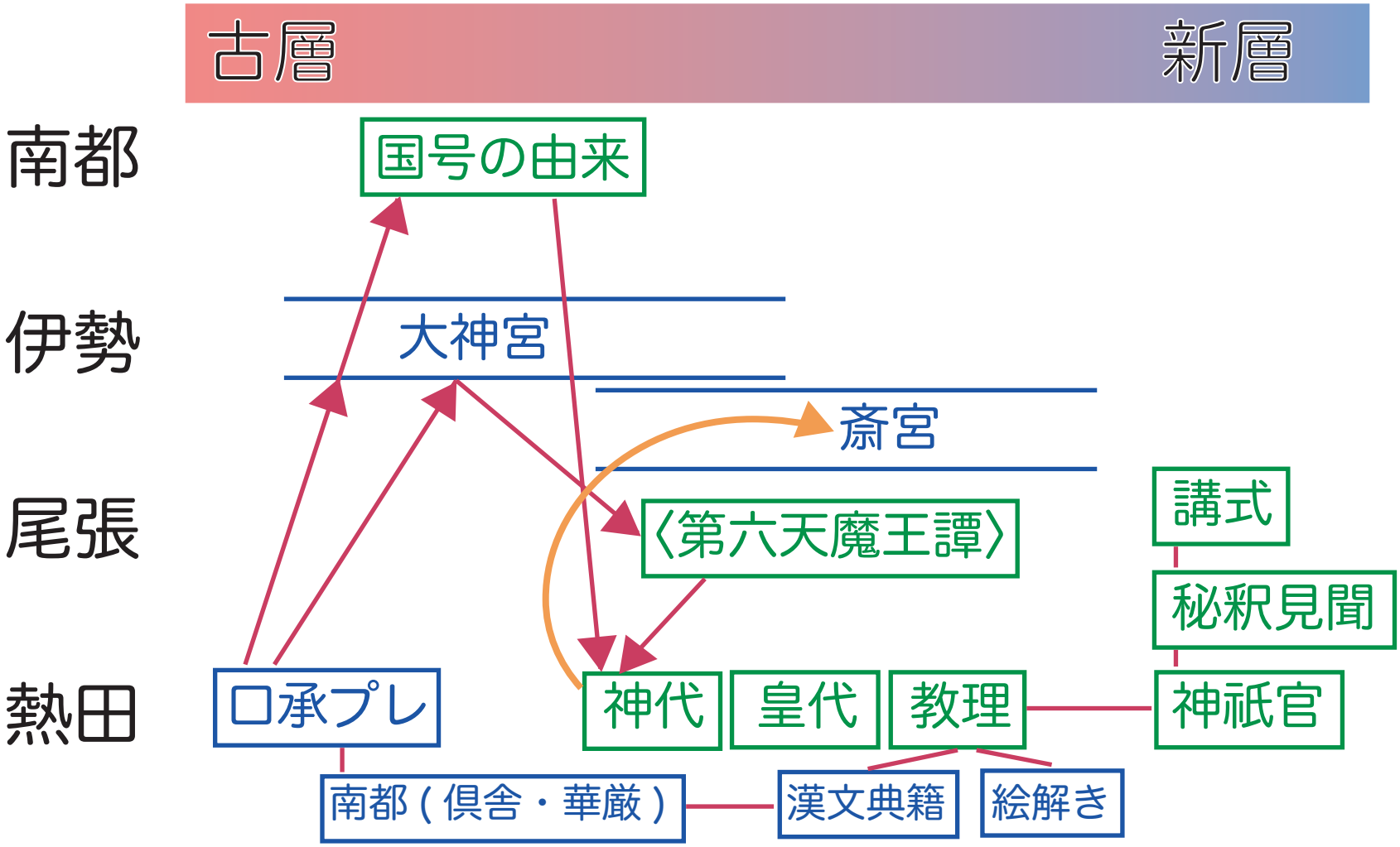
つぎに、『熱田の深秘』は仮名交じりの文章で語られるのですが、それとは大きく異なる、漢文で書かれた仏教典籍や、経典を注釈したようなテキストからの援用です。たとえば「密厳浄土」という言葉は、ダイレクトに仏教の中でも密教の言葉から引かれた言葉ですが、「花蔵世界」という言葉は、東大寺の大仏のような世界観・蓮華蔵世界を意識していると思われます。道行上人が書写したとされる『梵網経』という経典も、顕密（天台宗や真言宗）でも重要視されますが、南都六宗の頃からある経典です。「神代」に登場

する、第六天魔王も南都六宗で尊重される『倶舎論』でくわしく語られるようです。華厳も『梵網経』も『倶舎論』も仏教的世界観をしめす前提になるモノなので、顕密仏教や鎌倉新仏教でも尊重されることは間違いないのですが、熱田に南都六宗の研究センターを考えてもいいのかもしれません。考古学的には尾張願興寺と呼ばれる、古くは熱田神宮の神官である尾張氏の氏寺に目される廃寺があり、『日本霊異記』などで、南都と尾張の関連性がいくつか語られます。教理編や『熱田の深秘』が成立する段階で、南都からダイレクトに漢文典籍が持ち込まれたというより、尾張の熱田の近辺に、伝統的に存在した、神話研究所や仏教教理研究センターのようなモノが、フル稼働していたように感じます。

『熱田の深秘』の成立過程

神代

これまで見てきた、『熱田の深秘』の内容から分かることを、『熱田の深秘』の成立にかぎって、まとめていきましょう。まず、『熱田の深秘』の物語の種のようなモノ（口承プレ）が、口伝えのカタチであったのかもしれません。「大神宮の御事」『沙石集』では、〈第六天魔王譚〉が、伊勢大神宮の神官の口から語られたとされます。「口承プレ」の内容が、大神宮や社家を介在することで、南都（貞慶の『愚迷発心集』）や尾張（無住の『沙石集』）など、全国各地に拡散されます。伊勢大神宮でも、神道、仏教、問わずに、さまざまなテ



口承プレ：口伝えで語られた『熱田の深秘』に先行する話形。

国号の由来：貞慶「日本國名義」『愚迷発心集』、（天逆鉾・国号の由来（1－1））に類似。
また、貞慶には伊勢大神宮への参詣の伝説もある。

〈第六天魔王譚〉：無住「大神宮の御事」『沙石集』、（第六天魔王・神璽の由来（1－8））に類似。

神祇官：漢文化された『熱田の深秘』

秘釈見聞：『熱田宮秘釈見聞』漢文化された「教理編」の抜き書き。

神代 皇代 教理：仮名交じりの『熱田の深秘』
神代には「国号の由来」や〈第六天魔王譚〉の影響がうかがえる。
また（芥虫（1－7））など、斎宮を意識される逸話もあり、
斎宮に供給された可能性もある。
教理編の成立には、熱田神宮での絵解きや、
仏教典籍の影響が強くうかがえる。

キストの研究や、新たな文献の創造がなされていました。厳密に「国号の由来」や〈第六天魔王譚〉が、どこで生まれたのかは、はっきりしませんが、『熱田の深秘』のなかで（天逆鉾・国号の由来(1-1)）と（第六天魔王・神璽の由来(1-8)）が混在することは、製造者責任というか、物語を作り出した者だけが行えるようなダイナミックさを持っています。少なくとも、大神宮や社家から発せられた、「国号の由来」や〈第六天魔王譚〉を『熱田の深秘』が受けて、新たな解釈を加えようとしたのは確かなことではないでしょうか？

新たに創造されたのか、斎宮に古くから伝わっていた内容を明文化したのかは分かりませんが、『熱田の深秘』のなかには伊勢大神宮だけでなく、斎宮や斎王に関連したと思われる内容も見受けられます。熱田系テキストと伊勢の関連性の強さも指摘できますが、熱田は神話のふるさととして、古代から中央に神話や説話を供給していました。あるいは、斎宮という〈現場〉で、特定の人にしか示さない秘密の内容であることから『深秘』と呼称され、さらに供給元である「熱田」を冠して『熱田の深秘』と言ったのかもしれません。斎宮に関連するのは「神代」のみなので、「神代」のみで、成立するテキストがあったとしても不思議ではありません。

熱田宮の縁起へ

「神代」のみが『熱田の深秘』という題名のテキストとして存在したとすると、「『熱田の

深秘』なのに熱田神宮のことが語られないのは、なぜだろう？」という疑問もおこったのかもしれません。そのような反応を受け「皇代」のテキストは生まれたのかもしれません。

「教理編」については、「神代」とそれに付加された「皇代」というサブテキストとは、別の成立背景があるのかもしれません。「教理編」が「皇代」と切り離されて、『熱田宮秘釈見聞』という単独のテキストになるのも、そのような背景があるのかもしれません。ただ、「皇代」についても（三昧耶形(2-6)）のような教理編に近い内容もあるので、「神代」「皇代」というテキスト群に、別系統で成立した『熱田宮秘釈見聞』が付加されたというより、「神代」に「皇代」を付加しようとした時に、「教理編」も企図されたのでしょう。

「教理編」の成立には、熱田神宮での境内案内や絵解きのような〈現場〉がダイレクトに反映されていますし、密教的な世界観だけでなく、南都六宗で重要視された、華厳や『梵網経』のような仏教的な世界観をしめす前提になる内容が色濃くあらわれています。「教理編」の成立に合わせて、南都から新たに、そのような考え方が持ち込まれたと考えてもいいのですが、どうも、尾張氏の氏寺と目される尾張願興寺のような、熱田周辺に伝統的に存在する、南都ゆかりのテキストを考えてもいいと思います。

漢文化

ここまで、あまりくわしく書いてませんでしたが、『熱田の深秘』には、同じような内容

のテキストが何冊かあります。今回とりあげているのは、慶応大学本と呼ばれる「神道由來の事（假題）」「あつたのしむひ（熱田深秘）」と2分割されて活字テキストにおこされたモノが『神道大系』にとりあげられています。底本といって、現代語訳するのにあたって、一番多く参照したのが、この本になります。また、別に『神祇官』『別傳』と呼ばれるテキストも存在しています。教理編については『熱田宮秘釈見聞』として、独立したテキストとしても存在しています。これらの本は、底本が、ほとんど平仮名の仮名交じり文で書かれているのに対して、漢字が多く、送り仮名もカタカナです。

まず、書名の『熱田宮秘釈見聞』は『熱田の深秘』と似たような意味で、熱田宮の秘密の解釈の見聞きしたことというような意味でしょう。『別傳』は『熱田の深秘』の内容があまりに唐突であったために、異論として採用した内容、本文に対する別の伝えの意味でしょう。『神祇官』が難しくて、『神祇官』あるいは『神祇官私記』と呼ばれるのですが、私記は公的な記録に対するプライベートなメモの意味ですが、どうして神祇官なのでしょう？　全くの推測ですが、あるいは、斎宮など、都から離れた、中央機関に出張した神祇官（国の神道祭祀をつかさどる役所）の役人が、そこで、見聞きした内容を、書きとめたというような意味なのかもしれません。そのように見ると、（第六天魔王・神璽の由来（1−8））のような、神璽と呼ばれる、宮中で最も大切とされる3つの宝のウチの1つ

についての由来が書かれていて、神祇官の役人が、その内容に興味を持って、それを宮中に、とりこもうとしたと考えても不思議ではありません。

では、『熱田の深秘』のような仮名交じり文のテキストと、『神祇官』のような漢文に近いテキストの、どちらが先にできたのでしょう？　まったく、個人的な感触になるのかもしれませんが、仮名交じりのテキストが漢文化されていくのだと考えます。まず、『沙石集』では〈第六天魔王譚〉が、伊勢大神宮で神官の語ったこととして明文化しています。そのことから、『熱田の深秘』の背景となる、仮に「口承プレ」と呼ぶような、『熱田の深秘』の話の種のようなモノが熱田にあったのではないかと考えます。口伝えが明文化されるのが、1つの流れとして考えられます。口伝えを明文化するのに、仮名交じり文と漢文で、どちらが親和性があるのか？　というような問題で、個人的には仮名交じり文の方が、漢文より先んじるように感じます。まあ、祝詞のように宣命体と呼ばれる、漢文に片仮名や萬葉仮名を交えて、読み上げるようなテキストも存在するので、今の感覚よりも、仮名交じり文と漢文の間には、違いがなかったのかもしれません。仮名交じり文が先か漢文が先かという問題も、「神代」「皇代」「教理編」が、どの順番で成立したのかという問題も、実際は、創作の期間は一瞬の話で、ポンと『熱田の深秘』というテキストが、できてしまったのかもしれません。

成立時期

『熱田の深秘』は古くは『室町時代物語大成』という、御伽草子のアンソロジーのなかに収められていました。奈良絵本と呼ばれる、巻物や冊子の豪華な絵入りの物語が、室町時代に流行して、色々な説話が御伽草子として編まれました。御伽草子や絵巻物のなかには、絵の部分が省略されて、詞書きと呼ばれる文章の部分を、ぬき書きしたモノが知られているものがあり、『熱田の深秘』も慶応大学本の体裁や、内容から、御伽草子の詞書きのようなモノとして、取りあつかわれたという歴史があります。実際、『熱田の深秘』はいつ頃できたのでしょ？　個人的には「国号の由来」や〈第六天魔王譚〉が成立していることが、前提になると思います。また、斎宮に活気が残っているというのも1つの条件のように思います。慶応大学本の成立時期とは違いますが、『熱田の深秘』という物語の成立時期は、ともすれば鎌倉時代の終わり頃まで上げられるのかもしれません。

まあ、「神代」「皇代」「教理編」のセットの『熱田の深秘』というテキストは、「熱田伝来の秘密のテキスト」というよりも、「熱田宮の秘密の由来」という意味が強いと思うので、熱田神宮の歴史として、過去をふり返って、記録しておく必要があったのでしょう。こちらの点の方が重要かもしれません。例えば『石山寺縁起絵巻』なんかは、最初に、絵巻物が企画されてから、何回か時間をあけて、制作されている経緯があります。絵の具や書道家

など、パトロンや資金が集まらないと、絵巻物は作れないことの象徴なのかもしれません。この例を、あてはめれば、御伽草子という体裁であることから、その流行の時期を考えること以上に、熱田宮の縁起絵巻として、熱田神宮が、必要とする時にアプリオリに誕生したのが、『熱田の深秘』ということになるのではないでしょうか？

それから

今回、現代語訳した『熱田の深秘』を中心に〈中世日本紀〉の世界を、すこし、かいまみてみました。現在、〈中世日本紀〉に対する研究は、小休止状態なのかもしれません。

しかし、90年代から00(ゼロ)年代にかけて、多くの研究がなされ、パースペクティブとなる論文集もいくつか出版されるようになりました。おしむらくは、子供むけの〈中世日本紀〉の解説書が存在しないのが残念ですが、辞書などサブテキストを引きながら、大人向けの新書なら、子供でも、〈中世日本紀〉の面白さを、味わえるかもしれません。暗闇に、日光・月光が輝いたように。

〈中世日本紀〉を読むことの大切さは、現在の、寺院よりも神社が、きわだっているように思うのですが、明治維新によって、神仏判然令に始まり、神社合祀運動、靖国神社の問題につながるような、国家神道とか皇国史観にもとづく、神社のあり方に対して、現在も無批判に、それを継承していることが、端的にしめされるからです。

例えば、イザナギ・イザナミやアマテラスが日本で仏教が広まることを望んでいるということを、どのくらいの人が知っているのでしょう？　例えば、神社の境内で、僕たちは仏様をまつる空間を見ることができるのでしょうか？　参詣曼荼羅や江戸時代に、かかれた絵地図ではちゃんと確認できる施設です。例えば、神社で『般若心経』などの、お経を読むことを、どれだけの人が普通のことだと考えているのでしょう？

最近、とみに「日本の伝統」という言葉がもてはやされて、『古事記』の解説書など日本の神話に興味を持つ人も少なくありませんが、『熱田の深秘』に限らず〈中世日本紀〉の解説書が刊行されたと言うことは聞きません。確かに「切りすて御免」のような、現代残っていては、こまるような「日本の伝統」というのが皆無ではありませんが、明治時代以降に極端になった、神社の祭祀のあり方を変更しないことが「日本の伝統」なのでしょうか？明治時代には「神武創業」という改革運動がありました。「「日本の伝統」である神武天皇の始められたように、もどそう」という運動です。この運動には、徳川幕府や寺院勢力など、江戸時代に権力を持っていた人たちの力をそぐような効果があったのですが、「日本の伝統」という言葉は、これまでの日本人の社会秩序を、こわしてしまおうという意味もあるのです。

【参考文献】

バタフライ・エフェクト

バタフライ・エフェクト

合原一幸氏×爆笑問題『脳を創る男 カオス工学 ニッポンの教養』講談社 二〇〇八年

〈中世日本紀〉や『熱田の深秘』については、図書案内の「論文」を参照。

熱田神話研究所

斎部広成撰『古語拾遺』岩波文庫 二〇〇四年

「特別企画『先代旧事本紀』巻第五 天孫本紀」『歴史読本 2008 年 11 号』p192～215 新人物往来社 二〇〇八年

『熱田の深秘』の〈構造〉

伊勢からの需要

伊藤聡氏「第六天魔王説話の成立」『日本文学』44-7 一九九五年など

拙稿「〈第六天魔王譚〉～かまくらクライシス(2)～」 二〇一〇年

『解脱上人愚迷発心集』岩波文庫 一九三四年

無住一円『沙石集 上巻』岩波文庫 一九四三年

榎村寛之氏「斎王まつりによせて～別れのお櫛のこと～」『斎宮千話一話』 二〇一五年

つけたり

景山春樹「高宮信仰と多賀大社」『神体山』学生社 二〇〇一年新装版

『敏満寺の謎を解く-伝承する彫像と城塞・石仏群』サンライズ出版 二〇〇三年

古い神社（延喜式内社）の場所や祭神の考証については『式内社調査報告』皇學館大学出版部のような大著の研究がある。

教理編、成立の背景

西山克氏『聖地の想像力-参詣曼荼羅を読む』法蔵館 一九九八年

名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡 第7次発掘調査報告書 文化財調査報告53 埋蔵文化財調査報告書40』 二〇〇二年

「雷の好意で授けてもらった強力の子の話 上巻第三」など『日本霊異記』平凡社ライブラリー 二〇〇〇年

『熱田の深秘』の成立過程

成立時期

斎宮歴史博物館 図録『後醍醐-最後の斎王とその父-』二〇一一年

滋賀県立近代美術館 図録『石山寺縁起絵巻の全貌』二〇一二年

【図書案内】

子供むけの古事記・日本神話の現代語訳

松谷みよ子『日本の神話』のら書店　二〇〇一年新装版

古事記にとらわれず風土記などの、いつ話を大胆に取り入れた現代の神話。

福永武彦『古事記物語』岩波少年文庫岩波書店　二〇〇〇年新版

古事記の上中下巻を、ほぼ完訳（続柄や墓所などは割愛）子供むけのアトラス。

橋本治氏『古事記』21世紀版・少年少女古典文学館　講談社　二〇〇九年

古事記の上巻（神武天皇以前の神々の物語）にしぼって、神様の名前も説明。

大岡信氏『おとぎ草子』岩波少年文庫　二〇〇六年新版

神話ではないが中世に書かれた、不思議な物語群。昔ばなしの原典にも。

新書

子供むけに書かれた〈中世日本紀〉の入門書は、現在ないのかもしれません。大人向けですが比較的、読みやすい新書をあげておきます。

新刊で入手困難な書籍も多いが、古書で送料込みで新刊なみの価格なら入手しておいてもいいのかも？

斎藤英喜氏『読み替えられた日本神話』講談社現代新書　二〇〇六年

末木文美士氏『中世の神と仏』山川出版社　日本史リブレット　二〇〇三年

伊藤聡氏『神道とは何か-神と仏の日本史』中公新書　二〇一二年

山本ひろ子氏『中世神話』岩波新書　一九九八年

斎藤英喜氏『アマテラス-最高神の知られざる秘史』学研新書　二〇一一年

黒田日出男氏『龍の棲む日本』岩波新書　二〇〇三年

論文集

新刊の倍以上の値段の古書もあるが、県立図書館などでリクエストすると所蔵している協力している図書館から取り寄せてくれたりするので、そういうサービスを利用することも。

伊藤聡氏『中世天照大神信仰の研究』法藏館　二〇一一年

書店の在庫や、別の通販サービスには在庫があったりするので、探してみるのも。

原克昭氏『中世日本紀論考-註釈の思想史』法藏館　二〇一二年

山本ひろ子氏『変成譜-中世神仏習合の世界』春秋社　二〇〇〇年新装版

田中貴子氏『外法と愛法の中世』平凡社ライブラリー　二〇〇六年

小川豊生氏『中世日本の神話・文字・身体』森話社　二〇一四年

松本郁代氏『中世王権と即位灌頂-聖教のなかの歴史叙述』森話社　二〇〇五年

論文

雑誌に掲載された論文は、図書館の複写サービスでコピーを取り寄せることができます。書籍の場合はリクエストで持っている図書館から取り寄せてもらえることも。

阿部泰郎氏「熱田宮の縁起―『とはずがたり』の縁起語りから」『解釈と鑑賞』第63巻12号　一九九八年
伊藤正義「熱田の深秘―中世日本紀私注」『人文研究』第31巻9号　一九八〇年
伊藤正義「続・熱田の深秘―資料『神祇官』」『人文研究』第34巻4号　一九八二年
伊藤正義「中世日本紀の輪郭―太平記における卜部兼員説をめぐって―」『文学』第40巻10号　一九七二年
阿部泰郎氏「日本紀と説話」『説話の場―唱導・注釈　説話の講座3』勉誠社　一九九三年

あとがき

個人的に、「神道由來事（假題）」のテキストと出会って20年くらいになります。いずれは子供むけの現代語訳にしたいなあと思いつつ、時間だけがすぎてしまった。具体的な、きっかけみたいなものは「神道由來事（假題）」と同じころに読んでいた『神皇正統記』の現代語訳が出版になって、子供に読み聞かせるための注意書きを書いてみたことが「『神皇正統記』だけでなく、やはり「神道由來事（假題）」を読み聞かせたい」と強く思うようになったのでしょう。まあ現代語訳とはいっても「あつたのしむひ」については、単語を、おっていくだけで精一杯で、ちゃんとした現代語になっているのか、おぼつかない。

日本の神話を、しらべる前に仏像に興味を持っていて、しらべていたのが、今回の現代語訳には大きな手助けになった。大学の学生が親からの仕送りの減額で図書館に、こもって、しらべ物をすることが、むつかしくなっているといいます。べつに、とりたてて結果が、ともなわなくても、なにかにうちこむことは大切なことのように思います。

＊索引では現在一般に使われている読みがなに改めたものもあります。また、用語解説を附しました。

【索引・用語解説】

用語・書名

アウトライン　34　…あらすじ

【あ】閼伽(あか)　27
…水のこと。アクアの語源とも

朱鳥(あかみとり)元年　22
…天武天皇の15年。天武没年。

芥虫(あくたむし)　11 12 36 37 43 53　…ゴキブリの古称

葦原国(あしはらこく)　2　35
…日本の異名

熱田系(あつたけい)テキスト　34 43 44 54 58　…熱田で創造・伝来されたテキストの総称

熱田の深秘(あつたのじんぴ)　1 32 33 35 41 44 45 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60

熱田宮寛平縁起(かんぴょうえんぎ)　34　…寛平2年に書かれたとされる熱田神宮の由来

熱田宮秘釈見聞(ひしゃくけんもん)　1 39 40 47 48 53 55 56

あづま　16 18　…東の古称

あづまより　18　…語彙縁起説話

迹(あと)を垂(た)れる　6 7 18 23 36　…垂迹(すいじゃく)。仏様が神様として、すがたをあらわすこと

アプリオリ　59　…別の現象の流行に左右されない

天逆鉾(あめのさかほこ)　2 35 42 53 54　…矛(ほこ)、アメノヌボコ

一念信心(いちねんじんじん)　30
…1度願えば信じる心が、さだまること

因位(いんい)　23 26
…悟りをひらく前の姿

夷(えびす)　15 16 28 29註 33 37 41
…東国の蝦夷(えみし)のこと。

閻浮檀金(えんぶだごん)　26 40
…理想とされる金

擁護(おうご)　8　…みまもり

おもしろ　14 32 37 59
…光がもどって顔が白く見えたことから面白(おもしろ)という

【か】鏡(かがみ)　10 11 23 28 33 36 40 41　…青銅鏡。神様のよりしろにされることが多い

神楽(かぐら)　5
…神様にささげる、おどり

神在月(かみありづき)　11 36 43
…旧暦10月の異名

感応(かんのう)　25
…信心が神仏に通じて

鉄(くろがね)　5 11 12 36
…鉄(てつ)

熊野の本地　44

袈裟(けさ)　21 39　…僧のころも

化身(けしん)　21註 23 24 25註 26 28 29註 40 41　…べつの、すがたとして、あらわれること

化度(けど)　18 23　…教化済度(きょうけさいど)の略。人々を仏法に向かわせて救うこと

金(こがね)　25 26　…金(きん)

御殿(ごてん)　26 40　…社殿

コミット　34　…かかわりあう

垢離(こり)　30　…世俗のケガレを落とすこと。水垢離(みずごり)

【さ】済度(さいど)　8 18註　…救済と悟りへの道をひらくこと

サブテキスト　55 59
…それだけでは成立しづらい、補助的なテキスト

三悪道(さんあくどう)　20
…死後の6つの世界のうち下位の地獄(じごく)・餓鬼(がき)・畜生(ちくしょう)の道（世界）

三鈷・五鈷・独古・鈴　26
…金剛杵(こんごうしょ)・金剛鈴(れい)などの密教法具(ほうぐ)

三昧耶形(さんまやぎょう)　20 38 47 55　…仏の心持ちを持ち物や手のカタチで表現したモノ

紫雲(しうん)　10 24

磁石(じしゃく)　12 37

衆生(じゅじょう)　3 6 8 20註 23 30
…まよえる人々。一切(いっさい)衆生で生きとし生けるもの

成就(じょうじゅ)　2 7 13 23註
…なしとげること

成所作智(じょう しょさ ち) 23
…なすべき事をなしとげる智
生身(しょうじん) 22 39 46
…いき身の仏様
成仏(じょうぶつ) 20 38
…仏になること
神璽(しんじ) 註3 14 37 42 53 54 56
…日本のゆずり状
神明(しんめい) 14
…神明社の祭神は天照大神のことが多い
誓文(せいもん) 14
…契約書
詮議(せんぎ) 21
…評議して、あきらかにすること
宣旨(せんじ) 註6 11 16 註21 37
…天皇からの命令
蒼天(そうてん) 20
…あおぞら
蘇合(そごう) 28 41
卒爾(そつじ) 30
…注意や配慮もなく軽率に
村南・村北 9
大円鏡智(だいえんきょう ち) 23
…鏡のように照らしだす智
【た】代官(だいかん) 13
大紅蓮(だいぐれん) 12 37
…寒い地獄
内裏(だいり) 16 22 29
…天皇の居所
奈落(ならく) 20
…地獄
知行(ちぎょう) 12
…国を治めること
智拳印(ちけんいん) 2
…手のカタチ（印相）の1つ
知者(ちしゃ) 20
…道理をわきまえた人
ちはやぶる 5
…神にかかる枕詞
中世日本紀(ちゅうせいにほんぎ) 32 59
…中世の神話解釈
中台(ちゅうだい) 10 13 註29
…本尊(ほんぞん)
朝敵(ちょうてき) 12 37
…朝廷(ちょうてい)の敵
勅諚(ちょくじょう) 11
…朝廷の決まり
勅命(ちょくめい) 16
…天皇の命令
得道(とくどう) 20 26
…仏道をえること
【な】日本書紀(にほんしょき) 32 34 35 45
…日本最初の歴史書、日本紀(にほんぎ)とも
如意宝珠(にょいほうじゅ) 26 28 40 41
…願いを叶える玉
人皇(にんのう) 6 20
…神代と神武天皇以後を区別しての天皇
【は】パースペクティブ 59
…見通し
白鳥(はくちょう) 18 19 38
蓮切(はすきり) 28
…剣の名前
八葉(はちよう) 23 26 39 49 50
平等性智(びょうどうせい ち) 23
…自他の平等をしめす智
仏法(ぶっぽう) 2 7 12 13 註18 37
…仏教の教え
舟(ふね) 4 9
…小さな舟、容器
法界体性智(ほうかい たいしょう ち) 23 註29
…存在そのものとしての智
本地(ほんち) 註6 22 24 26 29 30 39 40 41 44 45 50
…神様の仏様としてすがた。本地仏。本来の姿
梵網経(ぼんもうきょう) 25 26 40 46 49 50 51 52 55
…仏教者が守るべき決まり(戒律)について書かれた経典
【ま】末社(まっしゃ) 11
…神社の中心的な祭神ではない神々、枝宮
妙果(みょうか) 26
…仏の悟り
妙観察智(みょう かんさつ ち) 23
…ありかたを観察する智
大和言葉(やまとことば) 5 14
…日本語。とくに漢語・外来語でないもの
リアリティー 32
…現実味
利生(りしょう) 30
…神仏の利益(りやく)
両界(りょうかい)・両部(りょうぶ) 7 36 49
…金剛界と胎蔵
我が朝(わがちょう) 2 6 16
…日本のこと

尊格・地名

【あ】愛染明王(あいぜんみょうおう) 20 38 …仏様の名前
愛智郡(あいちぐん) 23
…愛知県名古屋市近辺
浅間山(あさまやま) 27
…長野・群馬県境にある山。富士山の神様も浅間(せんげん)神社
阿閦如来(あしゅくにょらい) 23 39 …五智の東を象徴する仏
熱田(あつた) 20 21 25 26註 27註 28 29註 33 34 38 40 45 52 53 54 55 57 58
…地域としての熱田
熱田神宮(あつたじんぐう) 33 34 43 45 48 49 51 52 53 55 58 59
…現在の熱田神宮の呼称
熱田大明神(あつただいみょうじん) 15 19 20 21 22 23 28註 29 38 39 45 …テキスト内での熱田宮の祭神の呼称
熱田大神(あつたのおおかみ) 45
…現在の熱田神宮の祭神
熱田宮(あつたのみや) 22 24 25 29註 30 33 37 39 40 45 46 48 50 56 58 59 …テキスト内での熱田神宮の呼称。熱田社を含む
熱田明神(あつたみょうじん) 14 22 45 …大の脱とも考えられるが、使い分けがあるかも？
天照大神(あまてらすおおみかみ) 3 4 5 6 7 8 9 10 12 13 14註 23 35 36 37 39 46 …神道の最高神
天岩戸(あまのいわと) 5 14 35 36 46 …天照大神が、かくれた場所
阿弥陀(あみだ)如来 23 26 29 39
…西方極楽浄土の教主
天村雲剣(あめのむらくものつるぎ) 10 23 24 28 36 39 40 43 47 48 49 …ヤマタノヲロチの尾から出てきた剣。草薙(くさなぎ)剣とも
荒御前(あらみさき) 15 21註 37
…荒御鋒とも書く
阿波国(あわのくに)焚山 24
…四国・徳島県の剣山・焼山寺(しょうさんじ)周辺か？
【い】伊弉諾尊(いざなぎのみこと) 2 3 4 7 8註 13 23註 26註 35 36
伊弉冊尊(いざなみのみこと) 2 3 4 7 8 13 23 26 35 36 39 40
五十鈴川(いすずがわ) 6
…伊勢神宮、近くの川
出雲大社(いずもたいしゃ) 3 35
…出雲にある神社
出雲国(いずものくに) 5 7 8 11 17 24 36 40 46 …島根県の東部
伊勢大神宮(いせだいじんぐう) 15 16 27 28 36 37 38 42 43 44 52 53 54 57 …伊勢神宮
伊勢国(いせのくに) 6 11註 21 27 41 43 44 53 54 …三重県の大半
稲種公 → たけいなだねのみこと
稲田姫(いなだひめ) 9 10 23 36 39 43 …素盞烏尊の妻
伊吹（大）明神(いぶき（だい）みょうじん) 17 …伊吹山の神様
伊吹山(いぶきやま) 17 (24) 38
…岐阜と滋賀の境の山。筑紫にも
岩田川(いわたがわ) 18
…熊野に流れる川
岩戸山(いわとやま) 27
【う】宇佐宮(うさのみや) 15
…大分県にある神社
宇陀郡(うだぐん) 5
…奈良県の地名
恵比須(ゑびす) 3 35
…漁業の神様
夷(えびす) 3註 4
…兵庫・西宮神社の祭神、夷三郎
【お】奥州(おうしゅう) 27
…福島・宮城・岩手・青森と秋田の一部。陸奥(みちのく)
近江国(おうみのくに) 17 27
…滋賀県
大宮(おおみや) 26 27 28 29 41 50 51 …熱田神宮の本宮
尾張願興寺(おわりがんこうじ) 52 55 …金山の南にある尾張氏の氏寺と目される廃寺(はいじ)
尾張氏(おわりし) 33 45 52 55
…古くは熱田神宮の神官の家系
尾張国(おわりのくに) 16 18 20 23 33 34 52 53 …愛知県西部
海蔵門(かいぞうもん) 29 41

月蓋長者(がっかいちょうじゃ)
26　…インドの富豪(ふごう)
【か】金池(かなち)　25
迦毘羅衛国(かびらえこく)　22 39 49 50　…インドの釈迦族のいた国
佐羅陀山(からだせん・きゃらだせん)　26　…七金山の1つ。地蔵菩薩のすみか
紀大夫(きだゆう)　19 20 29註 38
…1説に源大夫の弟とも、妻とも
草薙剣(くさなぎのつるぎ)　23 28 33 39　…天村雲剣の異名
百済国(くだらこく)　8 36 44
…朝鮮半島にあった国
国常立尊(くにのとこたちのみこと)　24 40　…天神7代の初代
熊野(くまの)　18 38
…和歌山県の霊地
熊野権現(くまのごんげん)　3 7 8 18 23 28 35 36 39 41 44
…熊野の神様
景行(けいこう)天皇　14 15 37
外宮(げくう)　6 7 36 43
花蔵世界(けぞうせかい)　23 24 29 39 41 51　…蓮華蔵(れんげぞう)世界の略。厳密には華蔵世界
源大夫師介(げんだゆうもろすけ)
16 20 25 28註 29註　…松后嶋の家父長
皇太神(こうたいしん)　6 7 36
…日本での最高神
弘法大師(こうぼうだいし)　25註 27 40　…日本の真言宗の始祖。空海
五智如来(ごちにょらい)　23 28 29 41 45 50　…金剛界(こんごうかい)大日如来と東西南北の4仏
護法童子(ごほうどうじ)　25
…乙護法(おとごほう)。子供のすがたをした鬼神
金剛界(こんごうかい)　2註 7註 23註 49　…胎蔵(たいぞう)とセットで両部(りょうぶ)・両界という
魂・魄(こん・はく)　15 37
【さ】櫻宮(さくらのみや)　11
…伊勢の斎王をまつる神社か？
醒ヶ井(さめがい)　17 38
…滋賀県の地名
地蔵菩薩(じぞうぼさつ)　26 29 40 41　…釈迦の没後、この世を守る仏。地獄・子供を守護。お地蔵さん
信濃国(しなののくに)　26 27 40
…長野県
釈迦(しゃか)如来　7註 12 22註 23 39 42　…仏教の創始者。金剛界では北方は不空成就如来
十二所(じゅうにしょ)　24
十二神将(じゅうにしんしょう)
24　…薬師如来の護衛(ごえい)
十二天(じゅうにてん)　25
…四方八方と天地、日月をしめすインドの神様たち
春興殿(しゅんこうでん)　29 41
…内裏の内侍所の鏡がある場所
春敲門(しゅんこうもん)　29 41
聖観音菩薩(しょうかんのんぼさつ)　23 29 39 41
…六観音の1つ。南に浄土がある
常寂光(じょうじゃっこう)　29 41
浄瑠璃(じょうるり)世界　29　…薬師如来の浄土。瑠璃光浄土
新羅(しらぎ)　15 20 21 22 25 37 39 46　…朝鮮半島にあった国
白鳥塚(しろとりづか)　19 26 27 38 40 49 50
…(熱田)大明神の塚(墓)
新宮(しんぐう)　24
…本宮から新しく別れた神社
神功皇后(じんぐうこうごう)　14註 15 37　…応神天皇の母
神泉苑(しんせんえん)　27 40
…京都の二条城の南にある、その
震旦(しんたん)・中国(ちゅうごく)
2註 6註　…中国大陸
神武天皇(じんむてんのう)　14 37 60　…初代天皇。山幸彦の孫
【す】垂仁(すいにん)天皇　6 36
素盞烏尊(すさのをのみこと)　3 4 5 6 8 10 11 23 24 27 28 35 36 39 40 41　…イザナギ・イザナミの子供。三貴神の1柱
住吉大明神(すみよしだいみょうじん)　15 21 22 39
…大阪府に鎮座する神様
駿河国(するがのくに)・富士　26

…静岡県の中央の富士山
諏訪湖(すわこ)　27
…長野県にある湖
諏訪大明神(すわだいみょうじん)
15　…長野県に鎮座する神様
善光寺(ぜんこうじ)　26 40　…長野県のお寺、阿弥陀如来が有名
善女龍王(ぜんにょりゅうおう)
26 27 40　…龍女。女性が成仏することのシンボル
千の松原(せんのまつばら)　17 38
…滋賀県の地名。松原浜、千千(ちぢ)の松原とも
善名称吉祥王(ぜんみょうしょうきちじょうおう)如来　26註
…七仏薬師の1
【た】大自在天(だいじざいてん)
12 25 28　…インドのシバ神の異名
大蛇(だいじゃ)　4 9 10 17 24 28 29註 36 38 40 41
…神様が変じる動物の1つ
胎蔵(たいぞう)　註 7 24 26註 27註 40 49
…金剛界とセットで両部・両界
大通智勝(だいつうちしょう)如来
26　…『法華経』で説かれる仏
大日如来(だいにちにょらい)　2 3 12 23 24 35 39 40 42
…密教の最高仏
大梵天王(だいぼんてんのう)　7 36　…梵天。インドの神様
第六天魔王(だいろくてんまおう)
12 13 35 37 42 52 53 54 56 57 58
…他化自在天の魔王。仏教由来
高蔵宮(たかくらのみや)　25註 27 29 41　…高座結御子神社(たかくらむすびみこじんじゃ)
高天原(たかまのはら)　6 7 10 46
…天照大神が治める天上の国
建稲種命(たけいなだねのみこと)
23註 28 39 40　…ミヤズ姫の兄。稲種公。古事記では建伊那陀宿祢158
龍羅宮(たつやのみや)　25
…本宮裏の龍神社か？　高蔵宮の誤りの可能性も？
田中明神(たなかみょうじん)　7
…出雲にある神社か？
谷汲(たにぐみ)　27
…岐阜県揖斐川町の地名
仲哀(ちゅうあい)天皇　14註 15 37
中国(ちゅうごく)　18
…熊野と東国の間の土地
鎮皇門(ちんこうもん)　29 41
ツキメ・カシキメ　12 43
…斎女・賢女の意味か？
【つ】筑紫(つくし)　21註 22 24 39
…九州北部
月読尊(つくよみのみこと)　3 35
…月の神様
剣宮(つるぎのみや)　25
…八剣宮の八の脱の可能性も？
剣明神(つるぎのみょうじん)　19 38　…八剣の八の脱の可能性も？
手名槌(てなづち)・脚名槌(あしなづち)　9 36
…稲田姫の父母
天竺(てんじく)　2註 22 25 27 36 39 40　…インド
天照大神　→あまてらすおおみかみ
天神(てんじん)7代　2 3 35
道行法師(どうぎょうほうし)　20 21 22 25 26 33 39 40 46 47 51
…草薙剣を、ぬすもうとする
東国(とうごく)　15 16 18註 19 28 34 37 38　…内裏から関所より東の国
十束(とつか)剣　9 16註 24 28 36 40
鳥羽山池(とばやまいけ)　27
【な】内宮(ないくう)　6 7 36 43
南閻浮提(なんえんぶだい)　6 12 13　…天竺、震旦、我が朝のあるところ。南贍部州(せんぶしゅう)
丹生大明神(にうだいみょうじん)
3 4 5 35 36　…和歌山県の神様
日天(にってん)　25 40　…十二天の1。太陽をしめすインドの神
日本　3 6 7 8 12 13 14 20 21 22 23 32 34 35 37 39 40 42 45 49 53 60
…わが国。日の昇るところ意味
如是御前(にょぜごぜん)　26 40 46 49 50　…月蓋長者の娘。如是は「このように」の意味で、お経の始まりは「如是我聞」が多い
【は】博多(はかた)　21註 22 39
…福岡県福岡市の地名

百済国　→　くだらこく
白山(はくさん)　27
…石川・福井・岐阜にまたがる山
白山権現(はくさんごんげん)　3 7 8 35 36 44 45　…白山の神様
旗屋(はたや)　19 38　…熱田の地名
八幡大菩薩(はちまんだいぼさつ)　14 15 37　…応神天皇のこと。神様なのに菩薩（仏様の号）を名のる
八剣宮(はっけんぐう)　27 28 29 40 41　…熱田神宮の別宮
八剣明神(はっけんみょうじん)　22 39　…熱田神宮の別宮・八剣宮
播磨(はりま)の明石(あかし)　21
…兵庫県明石市
【ひ】氷上宮(ひかみのみや)　20 23 27 29 39 41 50　…名古屋市大高の氷上姉子(ひかみあねご)神社
毘沙門天(びしゃもんてん)　29 41
…四天王の1、北方を守る。不動・毘沙門で脇侍になることも
日永(ひなが)　21
…三重県四日市市の地名
肥の河上(ひのかわかみ)　24 40
…ヤマタノヲロチのいた場所
蛭子(ひるこ)　3 4 35 44　…イザナギ・イザナミの子供。不完全
日破宮(ひわりのみや)　25 28 29 40 41 46 49 50　…日割御子神社(ひさきのみこじんじゃ)
二見浦(ふたみのうら)　6
…伊勢の地名
二村山(ふたむらやま)　27
…豊明市前後付近にある山
補陀落山(ふだらくせん)　27
…観音菩薩が住むという山
仏生石(ぶっしょうせき)　23 28註 39 49　…釈迦誕生にかかわる石、あるいは仏心をもった石、仏足石？
不動明王(ふどうみょうおう)　22 29 39 41 46　…仏様の名前。剣と縄を持って、おこった顔をしている
不破関(ふわのせき)　16註 17
…近江と美濃の国境付近の関所
宝生(ほうしょう)如来　23 39
…五智の南を象徴する仏
北陸道(ほくりくどう)　8 36 45
…福井・石川・富山・新潟あたり
【ま】摩訶陀国(まがだこく)　7 36 44　…インドの釈迦がいた国
松后嶋(まつこのしま)　16 18 25 38 40　…ミヤズ姫の居所の場所。松炬嶋とも
密厳浄土(みつごんじょうど)　23 24 29 39 41 51
…大日如来を教主とする浄土。けがれた、この世界そのもの
翠ヶ池(みどりがいけ)　27
…白山の火口湖
美濃国(みののくに)　17 27 34
…岐阜県南部
ミヤズ姫(ひめ)　16 18 19 20 23 28 38 39 40
…日本武尊の妻。源大夫の姫宮
三輪明神(みわみょうじん)　3註 4 8 36　…奈良県の大神(おおみわ)神社、大物主
無熱池(むねつち)　25 27
…インドにある池
【や】薬師(やくし)如来　24 25 26 29 40 41　…東方瑠璃光浄土の教主。7体で一組という考え方がある
八頭(やつがしら)の大蛇　28 41
…ヤマタノヲロチのこと
日本武尊(やまとたけるのみこと)　14 16 17 33 37 38
…熱田神宮の主祭神の1柱
大和(やまと)国　5　…奈良県
用明(ようめい)天皇　11 36
【り】龍王(りゅうおう)　4 35
…海や水の神様
龍宮城(りゅうぐうじょう)　24 29 40 41 50
…乙姫のいる海の底の国
龍山寺(りゅうせんじ)　24 40
…名古屋市守山の龍泉寺か？
霊鷲山(りょうじゅせん)　27
…インドの釈迦が説法した場所
【わ】和歌の関(わかのせき)　6
…出雲にある地名か？
度会郡(わたらいぐん)　6
…伊勢の地名